
ACE COMBAT X2 JOINT ASSAULT ~ 結束の戦場 ~

J I N

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

A C E C O M B A T X 2 J O I N T A S S A U L T

結末の戦場

【Nコード】

N 0 6 0 5 0

【作者名】

J I N

【あらすじ】

まだ金融危機の影響が残る20XX年。

金融の危機は争いの根源となる中、とある民間軍事会社（PMC）マーティネズ・セキュリティ社の戦闘機パイロット、コールサイン“アンタレス1”は謎の武装組織“ヴァラヒア”の急襲を受ける。

彼と仲間たちは、目的や実態も不明な武装組織との戦いに身を投じ、

やがて世界中を巻き込んだ恐ろしい計画と対峙する事になる。

Sortie0 : 登場人物紹介・用語集

ACE COMBAT X2 JOINT ASSAULT } 結
束の戦場 }

『MS社』

《アンタレス隊》

アーレック・バラノフ・イエーガー(26)

本編主人公、マーティネズ・セキュリティー社M42飛行中隊の新生部隊アンタレス隊を率いる事になる。

生まれはロシアなのだが、家系にゲルマン系とWASP系も入り混じるため、本人曰く自分は多国籍人のような感じ。

そのため、国家に対しての忠誠心は殆どと言って良いほど無い。

しかし幼い時から空を飛ぶ事に憧れを抱いており、また訓練の成績も同期に比べたらなかなか良かったらしい。

もちろんそれが功を奏してか、こうしてMS社に入社し傭兵として世界中の空を飛ぶ事を夢見ている。

コールサインは“アンタレス1”。

彼は唐突に平和を乱した武装組織と、その背後で蠢く陰謀の戦果に身を投じる事になる。

愛機は実験機として製造され、廃棄されようとしていた機体をMS社が買い取って改修したというSU-35。

クリス・マキハラ(26)

アンタレス隊の二番機を務める女性パイロット。日系のアメリカ人で、米空軍時代はラングレー基地に配属されていたが、何らかの理由で軍を除隊してMS社に入社。性格はクールかつ、時に高飛車。前所属だった米空軍でも多数の男性に声をかけられるが、全員が撃墜されてきた。

コールサインは“アンタレス2”。正式配属前のミッドウェー島での訓練で、自らの犯した失敗と、それをリカバリーしてくれたアーレックに一定の信用を置き、アーレックを一番機として推薦し、アンタレスの二番機として空を舞う。

愛機はアメリカの最強戦闘機と名高いF-22Aラプター。

フェデリコ・アルファード（27）

アンタレス隊の三番機を務めるパイロット。

イタリア人であり、前所属部隊でちょっかいを出した女性士官が、実は基地司令の娘さんだったのが運の尽き。

命からがら除隊して、MS社に入社してきたが全く懲りてないようだ……。

そんな経歴を持つが、腕は決して悪くない。

対空と対地両方に対応できるマルチロール機を得意とする。

コールサインは“アンタレス3”。

愛機は欧州が技術の粋を集めて作ったとされるEF-2000タイフーン。

《レグルス隊》

クライヴ・エンズリー（32）

M42飛行中隊のアタッカー部隊“レグルス隊”の隊長。
アメリカ人で、元米空軍のパイロット。

現役時代にも、エディーとコンビを組んで中東や中央アジアに実戦
で赴いた事があるらしい。

コールサインは“レグルス1”。

愛機はF-15Eストライクイーグルだが、獅子座をモチーフにし
た部隊名故に“白獅子”とも呼ばれる。

対地攻撃もお手の物だが、既に何度か貴重な実戦を経験しているた
め、新入り達からは頼れる先輩として見られている様子。

エディー・バンクス（31）

M42飛行中隊のアタッカー部隊“レグルス隊”の二番機。

元カナダ空軍のパイロット。

コールサインはレグルス2。

愛機はF-15Eストライクイーグル。

S o r t i e 1 : F r e e A g e n t s (前書き)

注意

この物語は、ACE COMBAT X2 JOINT ASSAULTの二次創作小説です。

ACE COMBAT X2本編同様に、実在する建築物や国家や団体が多数登場しますが、この物語はフィクションであり、この物語に登場する団体への後援や、破壊行為の意志表示をするものではありません。

Sortie 1 : Free Agents

良く誰かが言っていた。

戦争は平和の終焉。訪れは唐突だと・・・。

こつも聞いた。

戦争こそが、平和とは何かを知る唯一の方法だと・・・。

20XX年 12月某日 アメリカ、ニューヨーク

極東のある島国に比べれば、ここの国の歴史なんてそこら辺の池
くらいの深さしかない。

十年くらい前に通っていたハイスクールの世界史では、せいぜいイ
ギリスから独立して数世紀っていうところだったと記憶している。
それでもこの国が未だにある程度の事に於いて世界一位と言わしめ
ているのは、先人達の涙ぐましい努力という奴なのだろうか。

そう言えばこの国は、大体の企業で能力というルーラーに従ってそ
の人物の価値が決まるらしい。

徹底的な能力主義と個人主義・・・なるほど、侍の国と言われる極
東日本は良くも悪くも団体主義。

アメリカは日本を最重要の同盟国と言うが、所々内部では未だにわ
だかまりを抱えたり、反りが合っていないのも頷ける。

真冬の繁華街、コンクリートジャングルを大勢の人々が白い息を

吐き、身を縮めながら歩く。

俺もその一人だ。

行きかう人々は、白人、黄色人、黒人・・・さすが、人種のサラダポウルと言われるだけはある。

本当にパツと見ても色々な人間が居る。

そして景気が悪くなったせいか、抱いていたイメージより人も街もちよっとばかり貧相になったように思えた。

なんて事を俺は考えているが、他人から見ればきっと俺もそんな街の風景を作っている一人なんだろうな。

着なれないスーツなんて着ているから、一段とそう見えるかもしれないと感じ俺は意識的に歩き方を正そうとするが、前から吹きこんできた寒風にあえなく破れる。

スーツを着なれていないから、今まで無職だったのかって？残念だがそれは違う。

つい十年間くらいまでは生まれ故郷であるロシア、そして最近では気ままに移り住んだドイツの空軍一兵卒として、訓練でそれなりの腕前を見せつける代わりに、俸禄としてそれなりのお世話を国から受け取っていた。

それには別に不満は無かったが、除隊した理由には変わらない毎日というのに飽き飽きしていたってのもある。

しかしなにより、俺にとって国に忠誠を誓うという事自体が性に合わなかった。

俺の体には、両親の祖父母を足すだけで、生まれ故郷のスラヴ系ロシア人の血はもちろん、ゲルマン系ドイツ、さらにはホワイトアングロサクソンの血まで流れている。

さしずめ俺の体は、人種のミキサーってところか・・・？

そんな出来方をした人間だからだろう、家族がら色々な国の文化やイデオロギーをじわじわしみ込むように教えられた俺にとって、善悪両方の意味で国境は無かった。

おかげで、祖国に忠誠を誓うとかなんとかいう連中の、言っている言葉の意味を理解するのに人一倍時間がかかった変な思い出もある。そんな時に、ドイツ空軍の同僚がなかなか美味しそうな話をしていたのは、ほんの数カ月前。

アメリカに本社を置く民間軍事会社が、航空部門の社員・・・つまり戦闘機パイロットを募集しているという話だった。

思えば昨今の経済危機。どの国も懐がさびしくなれば、手が届く隣国や豊かな資源が欲しくなるわけで・・・

歴史上そういつた経緯で始まった、第一次大戦や第二次大戦、親父の時代には中東で湾岸戦争なる戦争もあった。

確かに経済危機が来れば、戦争が起こるといいうのは理にかなっていない。

きつとこの会社も、それを見込んで戦力を増強、一企業として金を儲けようとしているのだろう。

そんなわけで俺は今、ある民間軍事会社・・・いわゆるPMCの航空部門の社員の採用面接に赴いている道中だ。

マーティネス・セキュリティー社

俺がドイツ空軍を離れるきつかけを作ってくれた会社。

なんでも俺がガキの頃におきた中東での戦争で、要人護衛を始めたのがきつかけで今では航空部隊の他に艦船、戦車などの陸上部隊を持つという結構大きなPMCになり上がった。

もちろん、旧東側のお偉いさん達に目を付けられないように、規模は一国家の軍隊に比べたら赤ん坊程度のレベル。

それでも腕利きが国籍問わず集まるから、その実力はは如何ほどかは計り知れない・・・

ストリートで拾った儲かって無さそうなタクシーの運転手に代金を渡し、そのイエローキャブから飛び降りるように貧相だった車内から出ると、目の前にはオフィスビル街の一角にでんと構える鈍色の高層ビル。

そのビルこそが、このマーティネズ・セキュリティ社の本社であり、書類選考に一応パスした俺の転職希望先だ。

入口には迷彩服にダットサイト照準をカスタムしたM4カービンで武装した数名の睨みが厳つい兵士が、似合わない役柄の案内員として俺に道を案内した。

その先にいた、どこにでも居るようなオフィスレディーが、胸でボードを抱えたまま俺に一礼。

「ようこそ、マーティネズ・セキュリティ社へ。 航空部門の一次審査を通られた方ですね？」

「ああ。 アーレック・バラノフ・イエーガー、前所属はドイツ連邦空軍、所属時の最終階級は少尉」

彼女は俺が乱雑に言った内容が、手元の書類と合致しているかを慣れた手つきで調べる。

そして何枚かめくった先に、どうやら俺が事前にこの会社に送っていた応募書類があったらしい。

十秒程度その内容を見て、そして最後に彼女は写真と目の前に居る俺が同一かを確認めて、改めて来賓をもてなすオフィスレディーの顔になった。

案内された会議室には、十名程度の顔ぶれがあった。

中のパイプ椅子に腰かけていた数名が振り向いて俺を一瞥すると、また前を向き直る。

空いていた椅子に座り、渡された資料の封を開けようとして俺はふと前に居るパイロット候補が、やけに細身なのに気付いた。

女だった・・・やや長めの黒髪、身長は160センチっていうところか。

すると俺が、いや彼女に気付いていた男ども全員を代表して、彼女の横に座っていたチヨイ悪そうな男が声をかけた。

「ヘイヘイ、ねーちゃん。ここは、輸送機パイロットは雇ってないんだぜ？ 知らなかったのか？ キュージョーのおかげで戦闘経験無しのジャパニーズが、よく書類審査に通ったな？ 社長に体でサービスでもしたのか？」

それを聞いた周りの男たちは、クククとやや下品な笑いを浮かべていた。

すると彼女はゆっくりと自分を馬鹿にした男にシャープに整った女性らしい顔を向け一言。

「・・・クリス・マキハラ、日系アメリカ人。前所属はアメリカ空軍第1戦闘航空団第27飛行隊、同じ部隊になるかは分からないけどよろしく」

値踏みするような高飛車というか、凜とした態度で彼女は自分の国籍と前の所属を言い放った。

それだけで俺も、そして何よりちよっかいを出してしまった男は身がすくんだ。

ラングレーの第1戦闘航空団の第27飛行隊だって！？アメリカ空軍きつてのエースが集まる部隊じゃないか！

それにあそこで使われる機体は、世界最強の戦闘機F-22Aラプター。

俺が乗った事のあるロシアのフランカーや、ドイツのトーンードが霞むくらいのポテンシャルを秘めた機体だ。

周りの連中に合わせるように、一気にお株が上がった彼女の後ろで、

おれはまるでコソコソと隠れるように資料に目を通し始める。

そうこうしているうちに、禿頭の中年男性と口を囲む濃い髭の男性が入室してきた。

前者の方は、デスクワークに慣れたサラリーマンのような風貌でスーツもそれなりに似合っではいた。

だが後者の濃い髭を持つ男性は、俺たち同様その格好は全く似合っていない。

スーツの上からでも分かる鍛えられた体が、隣の奴と一緒にすると語っているかのようにだった。

程なくして始まった説明によると、これから社員候補として半年以上の訓練やら適正やらを審査され、それで初めてこのMS社の傭兵となるらしい。

濃い髭の男性、フレドリック・バーフォードの話によればそう言う事だ。

やれやれまた新兵訓練ナイトキャンプかよと、枕替えをするたびに受ける羽目になる一種の儀式のようなイベントに、俺は胸中で何度か愚痴を呟いた。説明が終わり俺は部屋を出ると、購入した缶コーヒーを片手に資料やら何やらを読むことにした。

とりあえず今日中に、“現在のどの部隊にも所属していない”という確認書と“報酬と引き換えに命の危険がある現場を職場としてもかまわない”という誓約書にサインをして提出だけはしないとイケなかったのだ、それを書くついでにと言うワケだ。

そして俺がそれをダラダラと書き連ねていた時だ、自分の肩を誰かが陽気に叩いた。

こぼしそうになったコーヒーを置いてすぐに振り向くと、ブラウンヘアに長身の男が立っていた。

さっきのバーフォードとかいいう人物程ではないが、顎には良く整え

られた髭がやたらとおしゃれた。

こいつは確か、俺と同じ列に座っていたパイロット候補。

「よう、俺はフェデリコ・アルファード。紹介が遅れたが、元イタリア空軍だ。お前さん、見た所ドイツ人か？」

「どうしてそう分かるんだ？」

「お前さんからブンブンと、ビールとソーセージの臭いがする。

ついでにジャーマンポテトもだ」

「マジかよ・・・」

「っというのは冗談で、勘って所だが当たったみたいだな？」

「フフフ、残念だがおまけの三角だ。一応、生まれはロシアのモスクワなんでね」

それを聞くとフェデリコはほう、と口をややすぼめて少々驚いた仕事草を見せる。

「ええ？ ホントかよ！？ 全然ウォッカの臭いがしねえが？」

「そうだろうな。酒を飲む前にドイツに引っ越したし、それに元々体質的に酒は苦手なんだ」

俺にもゲルマンの血が流れているからだろうか、一応生まれはロシアにも関わらずこいつとも普通に話せる。

そして話は次第に、イタリア人らしくさっきの女性パイロット候補、確かマキハラとかいう女の事にシフトする。

「あのナリでラプターだぜ！ 俺は今日ほど見かけって言葉を馬鹿らしく思った日はねえよ！」

「確かに意外だった。あんなエースも入ってくるのか・・・ちょっと心配になって来たよ。軽い気持ちで枕替えしようとした俺自身」

「顔も悪くねえ。問題はキャラだが・・・まあ一見ギリギリつて所だな」

さすがイタリア人。

美人を見れば口説かずには居られないって、生粋ドイツ人の祖母が言ってたっけ・・・。

そういえば、生まれて早二十六年・・・これまで恋人や彼女なんたのが俺に居た事が無い。

もちろんというか、別に同性愛の方にも興味は無かった。

変わって俺の心を今も昔も奪い続けているのは、晴天と荒天、そして今日みたいな曇天と実に色々な表情を見せるこの大空だ。

子供の頃に親父に連れられて見に行ったロシア空軍の航空ショーが、当時まだ幼かった俺の心にガツンという衝撃を与えた。

まるで踊るように空を舞う戦闘機。平和仕様の旅客機やセスナなんかでは到底真似できない機動。

下で見て好きになって、そして新米の頃に乗ってみてさらに好きになったのは言うまでも無い。

その他にも自身のまるで多国籍のような生い立ちの事や、家族の事等を一通り話して俺はフェデリコと別れた。

そして近いうちに始まるであろう、また空へと上がるための訓練の日々の事を考えつつ、MS社の玄関から退社。

数日後、ステイ先のホテルのフロントで受け取った封筒の中身を見て俺は苦笑した。

いくつかある訓練班の割り当てにおよそ三名ずつの名前が書かれた書類には、俺とトリオを組む奴らの名前が書いてあった。

陽気イタリア人のフェデリコ・アルファード、ああアイツか。
そして……

「……マジかい」

女性ラプター乗り、クリス・マキハラ少尉。

彼女の名前があった事に、俺は早くもちょっとした波乱の幕開けを感じた。

それ以外にも、いくつか書類が入っている。

その中でも一番分厚いこの書類は……生命保険の案内？

なるほど、確かにこれから訓練や、将来的には戦場を飛び回る仕事
が待ち受けているだろう。

国に属している軍隊のパイロットならいざという時の保険の類は全
て国が一手に引き受けてくれるが、PMCとなれば話は別だ。

この冊子の表に描かれている、赤と黒の円の丸が二つ横に並んだよ
うなマークは、保険に大して興味の無い俺でも見覚えがある。

“オリヴィエリ・ライフ・インシュアランス”、サンフランシスコ
に本社を構える世界的な生命保険会社だ。

ロシアでは見覚えが無いが、冷戦終了とともに西側の陣営となった
ドイツのテレビCMでも何度か、このステイ先のホテルでもCM
にもう何度も登場していたので覚えている。

自室に戻って俺は柄にもなくその資料を読み漁る。

保険料は命の危険があるためか、それなりに高いが、もちろん仮に
俺が戦闘で死亡した場合に保険金受取人が受け取る額も一般的なサ
ラリーマンに比べれば破格な額だった。

そして冊子の真ん中をやや過ぎた辺りで、手首当たりで両手を広げ

誰かに対してやや笑顔で丁寧の説明をするような格好のスーツ姿の老人。

この年になれば禿頭はさほど不思議じゃないが、目じりに刻み込まれたしわの数が、この人物のこれまでの幾多の苦勞の数かもしれないと俺は思った。

彼こそがCEOのアンドレ・オリヴィエリ。そしてアメリカ経済界の支援の厚いMS社に、その中でもかなりの高額出資をする企業のCEOでもある。

まあその御恩とやらにせめて報いようと、こうして社員には彼の会社の保険を勧めているのだろう。

さっさとペンを走らせ、俺はMS社での初顔合わせに少しばかり緊張したのだろうか・・・

すぐにも襲ってきた眠気に逆らいきれず、机の上に保険の資料と申込書を置きっぱなしに、そのままベッドに寝転んだ。

きつと数カ月後には、一傭兵として広い空を飛んでいる事を願って・・・

Sortie 1 : Free Agents (後書き)

ようやく書く事に決めましたエスコンです。

本当はかつては04やZEROを書いてみようと思ったのですが、ググッてビックリ！

もうかなりの方が書かれているようで、自分のような未熟者が入るような隙間は全くございませんでした。

そこでというか、まだあまりSSが無いように感じた最新作X2の発売日から一カ月後に、善は急げと言う事で執筆を開始。そして今に至ります。

1週間から10日の間隔での更新を目指しております。エスコンに興味のある方や、こういうコンバット小説が好きな方はぜひとも応援をよろしくお願い致します。

また、暇な時間を見つけてはX2のインフラに手を出しています。

私のTACネームは”ZIZ”です。ZZZではありません(笑)
何度もインフラをやられている猛者のエース諸氏は、既に見かけられた方もいるかもしれませんね。
対戦では決まって超ペーパー装甲のCARRIBURNを使うアイツです。

もしお暇な方がいらっしゃるならば、メッセージなりで時間やルームを指定して頂けるなら、何も予定が無い時には向かいますので、こちらの方も宜しくお願いいたします！

では、今後ともよろしくお願いします。

最初は一話だけなのでやりづらいかもしれませんが、ご意見ご感想をお待ちしております。

また、インフラのお誘いも併せて書かれてもOKですよ（笑）

Sortie 2 : Antares Squadron

入社から十ヶ月後 20XX年 10月12日

どうにかこうにか、俺たちは基礎体力の訓練を無事パスし次の段階に進む事が許された。

しかしこの次の段階こそが、最も実戦的であり最も難易度の高い試験だった。

俺たちは今その試験パスのため、かつて日本とアメリカが太平洋の覇権をめぐって争った激戦地、ミッドウェー島の米空軍基地にいる。一応マーティネズ・セキュリティー社は民間企業だが、航空部門においては米空軍や米海軍航空隊との共同作戦が多いため、航空部門の上司たちの中には彼らの知りあいも居た。

きっと更にも上の方にも、そんなツテがあるのだろう。

ともかくミッドウェー島の空軍基地が、俺たちの次なるフィールドとなっていた。

そして俺たちが所属する事になる、M42飛行中隊の新人り達が訓練を行うフィールドだ。

ここにはMS社の航空部隊は、M42飛行中隊のみしか派遣されていない。

しかしその割には、人員が米空軍の飛行中隊のソレよりも明らかに多いのには、ちょっとした秘密があった。

実はこのM42飛行中隊の中には、複数の部隊が存在する。

その為、中隊と言う名前は飾りだけ・・・その実は大隊といっても差し支えないほどの戦力があつたのだ。

このミッドウェー島の基地では、朝から前にもやっていたような

基礎体力作りの訓練を、昼前からはいよいよ戦闘機を駆って空の訓練を行う。

とりあえず、メガホン片手に後ろから走る教官から逃げるように滑走路をそれぞれのペースで軽く往復してきた俺たち。

いつも往復約5kmの持久走を終えて集合場所となっていた、管制塔からやや離れた場所にあるハンガーに俺たちの機体がある。

中には俺たちに割り当てられた機体が三機、傭兵集団らしく全機が見事にバラバラだ。

まずどうにか既定のギリギリのタイムでゴールしたフェデリコが搭乗するのは、EF-2000・タイフーン。

コックピット付近に取り付けられたカナード翼にデルタ翼の相性は良く、訓練でもなかなか軽快な動きを見せてくれる。

そしてマラソン選手と見紛うくらいのスピードでゴールしたマキハラ少尉が搭乗するのは、彼女が以前に駆っていたというF-22Aラプター。

米空軍とは違い迷彩色がやや薄めで、彼女の肌のようにやや色白っぽいのが少し印象には残る。

空軍からの貸し出しという形ではあるが、彼女がこの名機に乗るといっなのは全うな筋だと理解できつつも、なかなか羨ましいものでもあった。

さて、最後には俺の愛機だが・・・シャープなコックピット付近とそれに似合わずある大型の後退翼は武装をたっぷり搭載でき、さぞ鈍重かと思われがちだが二枚の大きな垂直尾翼と水平尾翼、それに反して動く機首近くのカナード翼が、抜群の運動性能を發揮する。

子供の頃に憧れたフランカーの発展型である、SU-35の初期型。SU-27Mとも呼ばれるタイプだ。

実験機として作られ処分されていた所を、MS社がロシアの航空機メーカーから買い取ったらしい。

もちろんお互いの国に許可を取つての上だ。

かつては西側と東側のボスとして、冷戦を繰り広げた仲だというの

によくもまあ許可したもんだ。

それだけ生まれ故郷は経済的に危ないのか、それともMS社は東側にも相当なネットワークがあるのか、あるいは両方か。

しかし確実に言える事は、俺がコレ一機で背負った借金は相当な物だという事だった。

まあそんな悩みも、実際に飛んでいる時には吹っ飛んでしまう。そんな性格に気付き、自分はきつと操りやすい人間なんだろうなどと俺は人知れず自嘲気味な笑みを浮かべる。

午後の訓練はもうこれまで何回も行ったACM（空中戦闘機動）訓練をフルに使いこなしての模擬戦。

実際に兵装は使わないものの、リーダーや映像で撃墜や被弾を判定するから、極めて実戦に近い訓練と言える。

のしかかるGも加速もそのまま、無線交信だって臨機応変な対応が迫られる。違う事と言えば、ミサイルと機銃が実際なのか架空なのかの違いくらいだろう。

もちろん、実戦に近い訓練を受けるからというのもあるが、もう一つ俺たちを緊張させているある事実があった。

「おい、君たちがデルタチームか？」

「ええ。あ、貴方たちは確かレグルス隊の！」

「ああそうだ。お前たちの話は聞いている、今のところ全戦全勝だそうだな？ 新入りにしては凄いいじゃないか」

ロッカーでパイロットスーツに着替えている最中に、話しかけてきたのは今日の対戦相手、M42飛行中隊のレグルス隊隊長のクライヴ・エンズリー大尉と二番機をつとめるエディー・バンクス大尉だった。

どこかダンディーな雰囲気を漂わせるエンズリー大尉と、彼とペア

を組む面倒見の良い兄貴のようなバンクス大尉。

二人が駆るF-15Eは息のあったコンビネーションで、中東に派遣された時は対地攻撃もさることながら、迎撃に出てきたファルクラム編隊を秒単位で撃墜した事もあるらしい。

模擬戦の対戦相手が決まった一昨日に、俺は思わず身震いしたのを覚えている。

これまでMS社の教官に苦杯を舐めさせてきた俺たちだが、今日でいよいよ年貢の納め時だろうか・・・

嫌な予感が脳裏で蠢いていると、ロッカーのドアが勢いよく開け放たれ、少し眉間を狭めたマキハラ少尉が不機嫌そうな表情で顔を覗かせた。

「ちょっと、いつまで着替えているつもり？　ハンガー集合10分前よ！」

一応、俺たちは暫定の仲間と言う事でこの半年以上でこれくらいの口調で話は出来るくらいにはなった。

まだ腹を割った話と言うのは出来ずにいるが、それは必死に彼女を攻略しようとしているフェデリコも同じだった。

二人とも彼女の高くそびえたつ、城壁に阻まれている。

「あ、ああ。　マキハラ少尉、すまないが先に・・・」

「バロー！　女を待たせるなんてあるか！　良いから一緒に行けよ、お前ら」

突然バンクス大尉にグイッと掴まれて、俺たちはロッカールームのドアの前まで追いやられる。

先に失礼しますとケラケラと笑うバンクス大尉に一礼すると、俺たちはマキハラ少尉に続いてハンガーへと向かった。

「おい、うちの一番機みたいに・・・女の尻に敷かれるような男にはなるなよ！」

ロッカーから聞こえてきた言葉に、思わず嘔き出しそうになると、目の前には振り返りややムツとした表情のマキハラ少尉。はい・・・何も聞かなかった事にしよう。

ハンガーに到着した俺たちは、その場で簡単なブリーフィングを行った。

本来ならばブリーフィングルームを使っても差し支えないのだが、こども訓練生が多くては休み時間のトイレのように混雑するのは仕方無い事だ。

しかも俺たちが受けた今回の指令は、それはそれは至ってシンプル。

“二機のうち一機の敵機を撃墜せよ”

同じ指令をレグルス隊のエンズリー大尉達も受け取りそして軽く頷く。

あちらは、俺たちのうち2人を判定撃墜すれば終わりだ。

ふと横目でエンズリー大尉達の方を見ると、彼らだけでなくあと二人の俺たちより少し年上くらいの男たちもいた。

レグルス隊の隊員達がエンズリー大尉達も含めて4人に増えているのは、大尉達が操るストライクイーグルの後部に乗る兵装システム士官WSOの二人だ。

彼らとはここで初顔合わせになったが、軽く言葉を交わしても別に威張るような仕草や言動も無く、大尉達同様にこれからも上手くやっていけそうな感じだったというのは俺の所見だ。

「制限時間は20分だ。　開始と終了の合図はカーブスから行う。以上だ、解散！」

その場のパイロット全員がバーフォード中佐に敬礼を送り、急ぎ足でそれぞれの愛機へと向かう。

俺は何のマークも描かれていないSU-35のタラップをかけるのぼる。

ふと、マスクを付けながら俺は、エンズリー大尉達の尾翼には野を駆ける百獣の王ライオンが描かれているのに気付いた。

なるほど、獅子座の一等星レグルスをモチーフにしたエンブレム・
・言葉は悪いが米軍のパイロットが暇つぶし気分であつた俺たちの相手をしていたが、彼らとは違う。

こちらを睨むライオンが、そう言っているように俺は思えた。
やがて、エンジン始動を行いタービンの回転も上がり、整備員の手信号に従い俺たちはスロットルを少し押し込んで爽やかな陽が当たるエプロン（駐機場）まで進み出る。

俺たちがハンガーに来た時には、既にエプロンに出てエンジンが始動していたAWACS、E-767カーブスの姿は既になく、誘導路の方をあつた白い巨体がゆっくりと滑走していた。

『レグルス隊、ランウェイへのタクシー許可。　滑走路手前で待機』

『ラジャ。　それでは空で会おう』

『どっかの国の将軍みたいに、移動中に間違つてベイルアウトすんなよ〜』

管制塔からのタクシー指示を受けたエンズリー大尉達が会釈程度に敬礼をすると、俺たちの横をゆつくりと通り過ぎていく。

二機の姿が豆粒以下くらいに細かくなつた時、いよいよ俺たちにも管制塔から指示が飛ぶ。

『デルタ1から3、タキシーを許可。レグルス隊に続き、滑走路手前で待機』

『了解。デルタ1から3、タキシー許可。いくわよ、デルタ2、デルタ3』

「ラジャー」

使っているコールサイン、俺はデルタ2、マキハラ少尉がデルタ1で、フェデリコがデルタ3。

M42中隊の中にデルタ隊と言うのがあわけでは無く、フォネティックコードをそのまま流用しただけのコールサインは訓練生の時にのみに割り振られるものだ。

だから、マキハラ少尉がデルタ1であり一見隊長のようなのだが、別に彼女自身部隊を率いている気はしていないのだろう。

まあ俺もフェデリコも二人して、彼女が隊長でも経歴云々を考えても別に良い気はしていたのだが、そうなるに一応聞こえなかった事にしたバンクス大尉の言葉がグサリと来るわけで・・・

やがて誘導路を移動していると、先頭に行くマキハラ少尉のF-22Aが滑走路への進入のためターンを始める。

ふと滑走路の方へ目を遣ると、バーフォード中佐達の搭乗するAWACSカノーパス、続いてレグルス隊のエンズリー大尉達の機体があふターバーナー全開のままフワリと浮き上がる。

そしてタイミングを合わせたかのように、二機がクイツと機首を一気に60度以上まで挙げての力強いハイレートクライムテイクオフを見せてくれた。

『デルタ1から3、離陸を許可。離陸後は針路100、高度1000、AWACSカノーパスの指示があるまで針路と高度を維持せよ』

『了解。それじゃ、先に行くから、ちゃんと付いてきなさいよ』

三角のシャープなノズルからアフターバーナーの炎が細長く吹き出し、ブレーキをリリースしたマキハラ少尉のラプターは猛然と加速してあつという間に空へと舞い上がった。

『それじゃ離陸する。迷子になるなよ、フェデリコ』

『ああ、任せとけ。例え透明人間でも、女のケツを探すのは造作もねえよ！』

聞かなければ良かったと俺はマスクの下で苦笑しながら、スロットルを押し込んで後ろからアフターバーナーが噴き出しているのを計器で確認すると、ブレーキをリリース。

F1バリの速さで加速してく機体は、一定以上の揚力を得て機首を上げるとフワリと上に浮かんだ。

高度を100mくらいまで挙げると、俺は操縦桿をクイツと曲げてギアを出したまま右にクルリと軽快に横転を見せた。

ステルス性こそ犠牲にしているが、この大型の翼面積を持つスーパーランカーは、低速時でも高速飛行時と変わらない軽快さだ。

これならVT（ベクタード・スラスト）推力偏向）ノズルを持つマキハラ少尉のラプターと、機動性は互角かもしれない。

ギアを上げ、ゆっくりとした宙返りをしつつ高度を上げていく機体真つ逆さまに反転した機体に乗る俺が真上を見上げると、地上からフェデリコのタイフーンが離陸をしていた所だった。

やがて三機が揃うと、一応誰が隊長でも無いという事をそのまま現すかのように、俺たちは真横一列に並んで飛行する。

ミッドウェー基地付近を流れる綿雲を追い抜きながら飛行していると、高空を飛ぶ空中管制機カノーパスから通信が入った。

『こちら空中管制機カノーパス、バーフォードだ。デルター1から

3、聞こえるか?」

『デルタ1、感度良好です。』

『よし。まもなくレーダ索敵内にレグルス隊が見える筈だ。ここまで全勝だそうだな、今回も期待しているぞ』

『だってよレグルス1。こりゃ、負けてやらないとマズイか?』

『レグルス隊、その必要は無い。新人と思つて甘く見たら後悔するぞ。いつも通り、遠慮なくやれ・・・良いな?』

それに対してのわかつてるよというバンクス大尉の返答が、開始の合図だった。

レーダーに二機の機影が映し出される。

当然向こうにも、こちらの機影・・・しかしおそらくマキハラ少尉のラプターは映っていないだろう。

だがこのままかたまっていれば、自ずとステルス機の位置を晒しているようなものだ。

『デルタ1より各機、散開! 健闘を』

「ラジャ。さて、どうしたものか・・・」

しかし俺が悩んでいるうちに両者間の距離はみるみる迫る。そして・

・

“ビツビツ・・・ビーツ!”

「早速だツ!」

『デルタ2、回避だ!』

挨拶代わりのつもりか、バンクス大尉のレグルス2からS A A Mが放たれた。

もちろん実際には撃つては無いが、現実ではという仮想をして訓練に挑んでいる俺たちのもつとしてみると実際に撃たれたようなもんだ。

S A A Mは自機のレーダーで割り出された敵機の位置と、ミサイルの位置関係から敵機への誘導を行うという方式をとっている。つまり相手がレーダーを向けている方向から逃げてしまえば、ミサイルはその時点で誘導性能を失う。

そうと気づくなり、俺は一度右に傾けて逆方向の左へとロールしつつラダーを右へ、上に跳ね飛ぶような荒い動きなため、Gが体の内部にまでいろいろな方向からかかってくる。

そこから機体をロールさせつつのバレルロールでミサイルと、対向して飛んできたレグルス隊をらせん状に通過、すぐさま反転するためエアブレーキを展開し減速しつつ後方に居る筈のレグルス隊を探す。

だがそこに二機の姿は無い。一体どこへ!?

『上だ！ デルタ2、上にいるぞ!』

フェデリコの言葉を聞いて反射的に上を見上げると、直上に陣取ったレグルス1がこちらに真っすぐに機首を向けていた。

マズいと直感した俺は、咄嗟に機体を左へ倒した。

次の瞬間、後方に過ぎ去ったレグルス1と共に、愛機は機械音声で判定では何らかのダメージを受けた事を伝えた。

『デルタ2、尾翼にダメージ。だが戦闘には支障なし』

「ふう、危なかった・・・」

『ちよつと、しっかりして！ 開始早々何やってるの!』

予想はしていたが、無様な被弾に早速マキハラ少尉からお叱りの言葉を頂いた。

そんな彼女は目でレグルス2を捉え、必死に高Gに耐えながら回避機動をとる敵機を追い回している最中だ。

しかしマキハラ少尉に言い訳をするようだが、レグルス隊の実力は

本物だという事に俺は尾翼への被弾で気付いていた。

もし咄嗟にロールがコンマ数秒遅れていたならば、被弾していたのは後部に露出しているエンジンに他ならなかったからだ。

思わずマスクの下で生唾を飲み込みつつ、気を取り直して再びター
ン。

『おうおう、なかなかいい感じだぜデルター1は。それに比べて、

お前ときたら・・・』

『悪かったなナンパ野郎！』

『なんだとう！？』

大して堪えないであろう罵声を俺はフェデリコに言い放ちながら、
レーダー画面に目を通す。

するとどうか・・・さっきよりも明らかに、レグルス2の動きが
かなり緩慢になり始めた。

もう十回以上になる高Gターンの連続で、流石にエースといえども
体が参ったのだろう。

しかしそれなら、それについて行ったマキハラ少尉は一体何と形容
すべきなのか・・・。

そこであっちは任せておいて問題なさそうだと見た俺とフェデリコ
は連携して、判定で俺の機体後部に風穴をあけたエンズリー大尉を
追撃する。

彼は回避しながら蛇行するレグルス2の真上を、ゆっくりとした速
度で悠々と飛んでいた。

普通なら必死に逃げるパートナーのサポートに入ったりするものだ
が、意外と薄情なのか？

それともさっきロツカーでした会話を、まだ根に持ってるのか・・・
？

『射程に入る・・・X L A A ミサイルスタンバイ。 FOX 3！』

HUD上には実戦ならば俺が撃つたであろう長距離対空ミサイルの軌跡が描かれる。

それが徐々にレグルス1に接近していくが、未だにレグルス1は回避行動を取らない。

その時、俺は下向きに180度ロールしたレグルス1のエアブレーキが展開しているのに気付いた。

一瞬の間隔を開けて、カクンとレグルス1の機首が下を向く。

わざと機体をストールしたと思えば、今度はレグルス1はスロットルを押し込んだらしく、加速を始めた。

そしてその機体後部を、俺が放ったX L A Aの軌跡は虚しくも通り過ぎた。

だが俺にはそんな事をがっかりする余裕など無かった。

レグルス1が俺が放ったX L A Aを回避しつつやろうとしている事に、俺は即座に気が付いた。

それは罠だった。俺たちは、レグルス隊というエースを早くも追い込んでいると勘違いしていたんだ！

下を向いたレグルス1、その機首が捉えた前方にはわざと動きを緩慢にして敵を誘い込んだレグルス2。

そしてその後ろにはそうとは知らずに、レグルス2をしっかりと捉えて離さないマキハラ少尉の機体が！

『デルタ1、罠だ！ 回避！』

『えっ！？』

一瞬の間を開けて、マキハラ少尉の機体のすぐ上をレグルス1が通過して行った。

おそらく、判定ではバルカン砲を放ちながら。

俺の予感を肯定するように、カノープスのオペレーターの一人、マイケル・アリーナがマキハラ少尉が受けたダメージ判定が報告され

た。

『デルタ1、左エンジンにダメージ!』

『くっ……了解』

普通ならエンジンに被弾しようものなら爆発しかねない。

だがラプターは最新鋭の機体だけに、そういった可能性を極力減らす工夫がされている。

ただ左エンジンはミニマムまで絞ることになり、マキハラ少尉はエンジン停止状態の演出を余儀なくされた。

『なっ、大丈夫かよデルタ1。　しかし、なんだってラプターの位置が？　ステルス機だろう?』

フェデリコの疑問はもつともだが、偶然にも少し離れた所から見ていた俺にはその理由が分かっていた。

例え機影がレーダーに映らなくとも、仲間を追い回しているのならば敵機はそこにある。

一歩間違えばかなりリスクの高い連携攻撃だが、俺がそれを見抜くのに時間がかかり、畏が成功した結果として彼女に被弾判定を突き付ける羽目になってしまった。

『さて、仕上げるぞレグルス2』

『ああ、もちろんだ!』

勢いづいた二機が、再びターンしてこちらへと向かってくる。

レグルス2はさっきまで自分を追い回していたマキハラ少尉を、隊長機レグルス1は今度は俺を狙ってきた。

クソッこれじゃあマキハラ少尉を援護できない。

ならばフェデリコを向かわせるしかない。

『デルタ3、デルタ1の援護へ向かってくれ!』

『しっかしよお、お前だって・・・』

『良いから! 早く!』

行われているのが仮想の模擬戦だといつの間にか忘れていた俺は、彼女を落とさせたくない一心でフェデリコに彼女への援護に向かうように指示を飛ばした。

すると再び、ビツビツビツというレーダー照射を受けている警告音がコクピットに鳴り響く。

だが来ると思ったミサイルアラートは鳴らない。後方へ確実に回り込み、確実に当たる時を見極めてエンズリー大尉は撃つ気なんだと気付くのに、そこまで時間はかからなかった。

螺旋を描くバレルロールをしつつ後方の様子を伺うと、確かに後方から一筋の白線を引きながら俺に迫ってくるF-15Eの姿が! ちくしょう、やられてたまるか!

エンジンの性能は五分五分、カタログスペックでは機動性はこちらが優勢なのだが、それにパイロットが耐えられないのであれば何の意味も無い。

つまり俺がマキハラ少尉を助けに行ける可能性は、無いに等しかった。

勘違いされてはいけないが、フェデリコの腕も決して下手ではない。むしろ俺がこれまで出会ってきたパイロット達の中でも、かなりの上位に食い込める実力だ。

しかし俺の想像より鍛え抜かれたバンクス大尉は反転と思えばバレルロールという場合に、フェデリコの追撃をかわす回避機動とマキハラ少尉を追い込む攻撃機動の二種類を同時にやっつけてのけている。

これが実戦を経験しているエースなのかと、俺は改めて驚かされた。だが諦めたくは無い。これが戦場だったならば、部隊全員が下手すれば死ぬ事になるのだから。

ハイGターンを続けながら、息が上がりかけた俺はふと眼下を見下ろすとちょうど真下にはバンクス大尉の追撃を片肺になった機体で必死にかわそうとするマキハラ少尉のラプター。

その後方には必死に彼女を助けようとするも、なかなかバンクス大尉の機体を捉えきれないフェデリコのタイフーン。

するとふと俺はさっきのレグルス隊が罫を仕掛けた位置に、図らずも今度は自分たちが居座っている事に気付いた。

やれるか？その方法を熟知している相手に・・・それもレグルス隊は息を合わせてやったから半分成功したようなものだが、俺たちは今日が初めてな上にそんな事をやるなんて事前に打ち合わせなんてしてないんだ。

だが、ええい悩んでいる時間なんて無い！

どうせここで仕掛けなければ、俺たちは各個撃破される可能性大の運命なんだ。

一見ヤケクソのような覚悟をしつつ、俺はエアブレイキONとタイミングを合わせて機首をクイツと上に跳ねあげた。

相手の進行方向に対して、自分の機体が90度直立するように見えるコブラという機動だ。

機体全体を巨大なエアブレイキと化し、急激に減速する機体。

相手を自機の前方へと通過させるオーバーシュートという状態を作り出す事も出来るが、当然ながら相手からみれば通過前の自分の機体は動かなくなった良い的だ。

『甘い、もらった！』

機銃の射線軸に俺の機体を捉えたエンズリー大尉の勝利の声が聞こえた。

だが俺は右のスロットルだけを再び全開にしつつ、その勝利宣言は早すぎると心の中で呟いた。

真上を向いていた俺の機体は、下方にターントーブルでもあるかの

ようにクルリと横方向に半回転。
今まで青空を向いていた機首は、一気に真下の蒼海へと向く。

『何！？ クリビットでもない、あのターンは！』

射線軸を見事にずらされたレグルス1が虚しくも通り過ぎ、そして俺の真正面にはマキハラ少尉をロックオンしかけているバンクス大尉の操るレグルス2があった。

そしてスロットルをMAXまで押しこむと真下へと急降下しつつ、俺はさっきの仕返しとばかりにまだ気付いていないレグルス2目がけて機関砲のトリガーを引いた。

『なッ、なんだとッ！？』

コックピットの被害発生を告げる合成音を聞いて、驚いたようなバンクス大尉の声と少し遅れて、カノープスから今の攻撃の報告がもたらされる。

『レグルス2、コックピットに被弾。 撃墜です』

俺は思わずスロットルから手を放して左手でガッツポーズ。
無線からはバンクス大尉の残念そうな溜息が聞こえてきた。

それを聞いて俺は、もしかしたら少しやりすぎたかと少々罪悪感にさいなまれる。

しかしバンクス大尉の溜息に続いてエンズリー大尉の言葉を聞いて、その変な感覚は吹き飛んだ。

『見事だデルタ2。 咄嗟の機動で分からなかったが、まさか似たような状況を作りだされていたとはな。』

『完敗だぜ。 ったく、俺たちもまだまだってことだろうな』

『よくやったデルタ2。レグルス隊、惜しかったがこの負けをバネとして、今後も精進して欲しい。さて、全機基地へ帰還するぞ』

バーフォード中佐の帰還命令を受けて、俺たちは横一列に組んでいた編隊を解散。

帰還のために徐々に速度を落とし、ギアを出してさらに低高度へと向かった。

編隊を解散する前、俺はマキハラ少尉がコックピット越しに何か言いたげな表情をしていたのに気付いていたが、その場では敢えて何も聞かなかった。

レグルス隊の二機が先に降りると、俺たちは管制の指示でその後に続いて着陸態勢に入る。

ウェーブする誘導灯を過ぎ、滑走路がすぐ真下へと迫る。

キュツという軽いショックを受けて機体が地面と接し、跳ね上がったエアブレーキがみるみる速度を落としてくれた。

エプロンまでは管制塔、エプロンではハンガーで待機していた整備員の指示に従って、ハンガーの前でエンジンをシャットオフした。

機体に取り付けられたタラップを使い、狭かったコックピットから俺は這い出るように飛び出した。

回転がほとんど止まったタービンが奥に見えるエアインテークからは、燃料のケロシンが焼けたような臭いがする。

それに交じって感じるミッドウエーの海風を感じて、俺はそういえば地上に降りてきた事。

そして今でもまだ実感が湧かないが、無理だと思われていたレグルス隊に訓練で勝つ事が出来た。

いつもは派手に勝利を喜ぶフェデリコとは対照的に、クールにさらりとかわすマキハラ少尉は今日はどんな反応をするだろうか……。俺はやや背を屈めて機首の下をくぐると、俺の横約20mの距離に

駐機している彼女のラプターが見えた。

その俺に気付いたのか、すると彼女はなんて話していいのかわからないと言った困惑の表情を見せた。

これまで半年以上チームとして一緒にいたが、彼女のこんな表情は初めて見た俺は、少しドキリとした。

言葉を発するのが苦なのだろうか、そこで俺が何かを話しかけようと思えるが、なぜか俺も言葉が見つからない。

というより、あんな表情を見せられてなんて言って良いかわからなくなっただけで所だろう。

すると今度はそれをマキハラ少尉が察したのか、何かを言おうと少し前に進み出た。

さあ、どんな言葉が待っている？ 感謝？ それともスタンドプレーに対するお叱り？ それとも・・・

だが彼女の言葉を待つより早く、俺の視界を太い腕が多い、ギリギリと頭を激しく締め付けた。

「へへッ、やってくれたな新人！ まあ会社としては嬉しい限りだろうが、もうすこし俺らの身も考えやがれ！」

俺は声で俺の頭にヘッドロックをかける人物の正体を悟った。

バンクス大尉だ。それならば、きっとエンズリー大尉も近くに居るのだろう。

そういえば俺はこの人を判定撃墜しちゃったんだっけ？

やはり新人という立場以上、あんな風に頑張りすぎるのは良くなかったか？

しかしその割には、バンクス大尉の口調は別に怒っているようには聞こえなかった。

「イテテテッ、大尉、痛いですって！」

「わかってるよ、んなこと言われなくなっただけ！ でも俺は別に根に

持ってなんかいねえよ、なあそつだろクライヴ？」

「ああ、そつだ」

あ、この様子じゃエンズリー大尉もカバーしてくれそうにないや・

さすがに痛みで参りかけた時に、バンクス大尉が俺の耳元で叫ぶようにある命令を言い放った。

「おい、聞こえているか新人！ 別に謝る必要なんて無いがよ、こは社交辞令として今日は俺たちの酒に付き合え、良いな！」

「え！？」

「返事は！？」

「は、はい！」

よしというバンクス大尉の言葉と共に、彼のヘッドロックから解放された俺は、ニヤニヤと笑っている二人の後ろ姿をようやく直視できた。

じゃあな、待つてるぜとバンクス大尉が後ろ目に左手を振りつつ、ハンガーの方へと消えて行った。

多分大尉達は俺が酒に弱いという事は知らなかったと思うが、勝利の代わりにとんだ貧乏くじを引いてしまったようだ。

そして不幸は更に続く。

ラプターの方を見ると、そこに既にマキハラ少尉の姿は無かった。

日本のことわざ“泣きっ面に八チ”とは、まさにこの事だ。

食堂でフェデリコと夕食を食っている最中も、俺は時計を見上げて約束の時間が刻一刻と迫っているのを恐々と感じていた。

たまにはマキハラ少尉も含めての三人で食事をとる事もあるので、MS社に入社して以来最悪な日になりかねない今日に少しでも話で

もして気を紛らわしたいと思ったが、その願いはむなしくも叶えられそうに無かった。

「それよりもまあ、へっ見直したぜ」

「見直したって、何をだ？」

「何言つてんだ。お前の腕だよ腕！」

フェデリコが浮かない顔の俺の額を小突いて初めて、俺は彼が言うおうとしている事を悟った。

「まったく、こんな時にはトロいのに空ではアレだ。俺もそうだが、

多分一番驚いていたのは彼女だぜ」

「マキハラ少尉か？」

「当たり前えだ。他に誰が居るよ？ 売店のおばちゃんか？」

「いや、それは御免だ」

それを聞けば嬉しいと言えば嬉しい。

まあもう一步踏み込んで願望を言うならば、それは出来れば彼女の口から直接聞きたかったのが素直な所だ。

だが時計が告げる時間を見て、俺は思わずため息をついた。

あと小一時間くらいに迫るレグルス隊との歓迎会もとい懇親会のため、俺の割と細い食はいつもに増して進まない。

俺が半分くらいしか食べ終えるくらいの時に、フェデリコはとうとうもう食べ終わって食器を食堂に返しに行つて帰ってきたところだった。

バンクス大尉のように軽く手を振り、そして申し訳程度に“死ぬなよ”と別れの挨拶を言い残して去って行った。

フェデリコが去って五分ほどしても、さっきからメシがどうも減っているように見えない。

満腹の時やこう言う具合とにかく食が進まない時と言うのは、そういう妙な錯覚が余計に心を暗くしてくれる。

ふと、俺はメニューにミルクがあるのを見て、そういえば酒を飲む前にミルクを飲めば、胃腸に粘膜を張って酒の吸収を穏やかにしてくれるとか聞いた覚えがある。

口にもう冷え切ったピラフを運びながら、俺がメニューのドリンク部分に目を通していた時だ。

唐突に背後からあの声が出た。

「イエーガー少尉、少し良いかしら？」

「!!!!!!ゴホゴホッ!!!!」

彼女の愛機が得意な戦術のように、いつの間にか自分の背後にいたマキハラ少尉が自分の名前を呼んだ。

だがタイミングが悪かった！

慌てた俺はピラフが気道に入り、返答する以前に激しく咳き込みというなんとも無様な醜態を晒した。

30秒もしただろうかと言うくらいに、俺の気管はようやく落ち着きを取り戻す。

ようやく直視出来た彼女の格好は、昼間の引き締まったパイロットスーツに比べて格段にラフなジャージにTシャツという格好だった。その彼女が、心配そうに俺の顔を覗きこんでいる。

「だ・・・大丈夫？」

「気道にコメが入っただけだ。それより、何だい？」

「ちよつと考えただけど、一つお願いを言いに来ただけよ」

「お願い？」

「聞いているでしょう？ 順調にいけば一週間後くらいには、私たちはM42飛行中隊の正式分隊として配属が決定される」

そういえばそうだった。

もともとデルタ隊というのは本当は存在せず、MS社の傭兵になるパイロットが訓練生時代に恒例として使うコールサイン。

もちろんそんな名前ですつといるワケにもいかず、11月にある米軍と自衛隊の太平洋上での合同演習にタイミングを合わせるように、俺たちは正式なM42飛行中隊の一員として登録される筈だ。

彼女の“お願い”とやらは、それに関係した事なのだろうか……。すると彼女は、さらにズイツと俺の前に詰め寄ってきた。

「単刀直入に言うわ・・・イエーガー少尉、あなたにこれから私たちを率いて欲しいの」

その言葉をかみ砕いて飲み込み、さらに理解するのに俺はかなりの時間を要したように思えた。

なんだって俺が!?

俺はロシア空軍時代も、ルフトバツフェの頃も、飛行隊長なんて任されていたような人間じゃないぞ。

とりあえず、俺は二つ返事では承諾しかねる頼みを持ってきた彼女に、その真意を確かめる事にした。

「待ってくれ! 俺は隊長なんてやった事も無いし、ロシアでもドイツでも、ただのうのうとノルマをこなして空を飛んでただけの奴だ。 そんな俺に隊長なんて・・・」

「それなら、私だって同じよ」

自分を自虐的に卑下し始めた俺だが、マキハラ少尉の一言が俺を黙らせた。

彼女の表情は真剣そのもの。元からフェデリコのように軽々しく冗談なんて言うような彼女ではないが、今回もその例にもれず彼女の真剣な説得が続く。

「私だって、別に隊長なんてやった事は無い。それにデルタ1つというコールサインは、単に名簿の順で決められただけで、私が隊長って決められて付いたものじゃないわ」

「しかし・・・」

「それに正直なことを言うとな、私、心のどこかで貴方たちを見下していたと思うの」

その言葉を聞いて少しショックだったが、バンクス大尉が言っていたように尻に敷かれかけている俺たちの事を考えれば、少し仕方ない気もする。

それにマキハラ少尉が、そんな事を思っていたと正直に告白してくれた事が、むしろ俺にとっては嬉しかった。

「だから今日も、一人突っ走るようなあんな戦い方をして・・・本番だったら私、死んでたかも」

「・・・」

「まだ分からないの？ 私は今日、貴方に助けられたのよ。仲間の中で良い腕を持って、罨を見抜くような広い視野を持つ人に、隊長をお願いしたいと思うのは筋だと思わない？」

そこまで言われて腹の奥底がむず痒くなるような気がしたが、どうにか根性でそれを顔に出すまいと俺は耐える。

まさか俺にそんな価値というか、そこまでべた褒めにされるほどの実力云々があるとは、これまで夢で考えた事も無かったからだ。

何か反論できる材料は無いか？ そうだ・・・！

「しかし、バーフォード中佐がなんて言うか・・・。やっぱり、それは中佐達指揮官が決めるべきじゃないのか？」

「あら、ある程度は仲間内で話し合って決めてくれというのは、中

佐の言葉よ。」

あの中佐め・・・いや、これはむしろマキハラ少尉の事前の準備の良さを呪うべきだろうか。

今更自分はそれでもそんな事を任されるような人物ではございませんと、反論を繰り返すのも駄目だろうし、反論できる事が俺には無くなってしまうた。

フェデリコもフェデリコで何かと人に流される性分がある彼は、別にそれでも良いぜと大事な事でも軽い口調でそう言うのが目に見えていた。

マキハラ少尉が同意していると知れば、尚更そう言うだろう。

沈黙したのを同意と見るや、彼女はそれじゃお願いねとさっきまでの真剣な表情を解いて、まるで厄介事を押し付けたように去って行った。

まあ彼女の性格から考えて、厄介事を押し付けるくらいなら自分でやるような人間だから、隊長になってくれという頼み事はきつと本心からだろう。

大変な事になったような気がしたが、俺はそう信じたい。

しかし、隊長になった俺って想像した事無かったな・・・どんな感じだろう。

そう気を抜きかけた時、彼女が再び顔を覗かせた。

そして一言“今夜は頑張つてね”だそうだ。

食堂の時計を見上げると、約束の時間まであと30分足らず。

さっきまで振るわなかった食欲が自然と湧いてくるようだった。

俺は5分もしないうちに皿を平らげると、食器を返却して軽い足取りでバンククス大尉達との懇親会という名の戦場へと向かった。

不安だらけだが、これだけは確実に言える。

生まれて初めてかもしれないが、今夜は美味しい酒が飲みそうだ。

|||||

「隊長お、聞きましたかい？」

「ああ、ファリドから聞いた。あの“獅子座”がやられたらしいな」

「だから言ったじゃないか、アイツらは空戦は大したことない奴らだつて」

ブロンドのヘアに、綺麗に切りそろえられた口髭を持つ男は、最後に生意気そうな言葉を発した男の方を向いた。

ソファアを一人で陣取る彼は、この部隊の中では一番若いが、自信たっぷりの言葉に裏付けされるように空戦格闘の能力は折り紙つきだと、部隊長である彼自身もそう思っていた。

するとまだどこか子供っぽさが残るような顔で、空戦を語った彼はおもむろにテーブルに手を伸ばして、皿にあったクリームサンドチヨコクッキーを齧っている。

「だが、その例の新人連中が成し遂げた記録は、世界中どこを見ても類の無い事だそうだ。もちろん、実力者を引き抜いて採用できるPMCならではの出来事だがな」

「へへッ俺は賭けても良いぜ。多分、そいつらはエースになれるだけの、力はあるだろうよ。俺たちもうかうかしてられないぜ！」
「フン、どうだか・・・」

あくまで彼らの事を認めようとしないう空戦専門のトーリヤだが、隊長である彼はそれを別にも留めなかった。

だが対称的に彼らの実力を好評価するオルマに対しても、その意見

に賛同と言つワケでは無い。

(そう、全ては形で現れるさ。 一国の軍人なら名誉・・・そして俺たちのような傭兵なら、金だ)

その事実が告げる結果しか、彼は信じようとしなかった。

それが彼、M42飛行中隊の中でも一番扱いにくい曲者が揃ったライジェル隊を率いる隊長、ミロシュ・スレイマニの鉄則の信条だった。

更にスレイマニは考えた。

もし彼らが敵として対峙する事があるならば、その分だけ自分たちの価値を高める事が出来る。

それこそが金を食つて太る、傭兵たる者の最もしつくりとくるスタイルではないか、と。

|||||

この日から数えて5日後。

あの晩は記憶が数時間抜けた俺が、ようやく二日酔い、いや三日酔いから回復した翌々日に、デルタ隊の解隊に伴って正式にM42飛行中隊の一隊として配属が決定された。

そして気になる部隊名だが・・・それは十二正座の一つ、さそり座の赤き一等星“アンタレス”。

辞令交付を終え、中佐達に言われてハンガーへと向かった俺たちは、それぞれの愛機に赤と黄の鮮やかな色調のエンブレム、その中に描かれた一撃が致命傷の毒針を持つサソリが、不気味なようで頼もしくも思えた。

この後、世界に名を残すことになる“赤サソリ”の誕生の時だった。

そしてまるでそれに合わせるかのように、“彼ら”が世界を鮮血が
迸る戦場へと変えるべく、着々と準備をしている事に、俺たちは気
付く筈も無かった。

Sortie 2 : Antares Squadron (後書き)

トリーヤが食べていたクリームサンドチョコクッキー。

この正体は、ちょっとしたネタをご存じのエース諸氏ならば知っている筈(笑)

Sortie 3 : Steel Axe

ある日、心優しい木こりが誤って池に斧を落としてしまいました。

大事な仕事道具を失い、泣いていると池から神様が現れて言います。

「君が落としたのは、この金の斧か？」

すると、木こりは答えます。

「いいえ、私が落としたのは、粗末な鉄の斧です」

すると神様は頬笑み、こう言いました。

「お前は正直者だ。 ほうびにこの金の斧も銀の斧もやろう」

こうして、心優しい木こりは予期せぬプレゼントに飛び上がって喜びました。

それはイソップ物語という、子供たちに道徳観を身につかせるための童話の中の一つ・・・ “金の斧と銀の斧”

だが不思議と、その思いがけない収穫を得るきっかけを作った“鉄の斧”は、話の一説にほんの少し登場するだけ。

それが無ければ、そのようなビックリするような富を得る事も無かつただらうに・・・。

|||||

遠くにサンフランシスコ湾と、その湾にかかるゴールドゲートブリッジ金門橋が見える。

まるで高空にいるような錯覚を覚えられる程の高いビルの上から、彼はその眺めを幾度となく堪能してきた。

振り返ると彼のデスクの奥に光るテレビは、いつものように彼にとつてはつまらないスポーツやエンターテイメントの話題ばかり。

たまに財界に君臨する重鎮として、やや興味をそそられる経済の話題がポップアップされるが、金融危機の後遺症があるためか、そこまで長くは報じてくれない。

彼がそのテレビを消した時、着信音がタイミングを合わせるようにほぼ同時に鳴る。

「オリヴィエリだ。 ああ、君か。 そうか、

いよいよか。 分かった、君たちの働きに期待している。

. なに、金の事なら心配するな。 その代わり、こちらのわがままも多少なり聞いてもらう。 たったそれだけだ、それで商談成立だ」

すると、オリヴィエリはしばらく電話の相手の話を聞き耽るように、相槌だけを打ち始める。

いつもそつだ。 私は結果のみを求めるといつのにも、彼らときたら信条やら思想やらを語りだす.

まあ彼らは貴重な“労働力”だからと、オリヴィエリは心の奥底で湧きあがるイライラを押さえこむ。

やがてあらかた言いたい事を言い終えたのだらう。

結果は必ず残すと歯切れの良い返事をする、電話の相手は通話を足早に切った。

彼は携帯電話をポケットに押し込み、もう一度ここから見ると大きな池のようにも見えるサンフランシスコ湾を眺めた。夕暮れの茜色に染まる湾。

この湾が更なる生々しい血の赤みを帯びる時が来たのだと、彼は先程の心情とは対照的に思わず笑みを浮かべていた。

そう、地球全土に行きわたるその池には、目も眩むほど光る金の斧が眠っている。

そしてオリヴェイリは感じていた。

その金の斧を得るために必要な犠牲……つまり“鉄の斧”をたつた今、自分が投げ込んだのだという事を……。

|||||

20XX年 11月12日

「おっ、アンタレス1、どうしたんだい？」

「いや、今日の訓練が終わって着陸して滑走の時、機体が少し右に引っ張られるような感じがしたんだ。」

「なに、本当か？ うーん、もしかしたらタイヤの空気圧が低下したか……とりあえず見てみるか」

「そうかい、じゃあ手伝うよ」

「おっ、悪いな」

本名ではなくコールサインが既に名前と化しているが、俺は別に気にしていない。

勘違いかもしれないが、むしろその方が俺はなんか気楽に呼ばれて

いる気がする。だから気にしていないのだ。

そんな俺が出張って来ていたのは、俺たちの機体が格納されているハンガーだ。

用件は俺が言った通り、どうやら右のギアのタイヤの空気圧が低下しているらしい事。

だがそれは事実だがあくまでも名目、実際はこうやって整備員達と談話でもして時間をつぶしたいというのが本音だ。

それもただ突っ立って整備員達が作業をしているのに、横からんやかんやと喋りだすのでも少し申し訳ない気もする。

なのでこうやって自分でも手伝えそうな箇所の修理を頼むという名目で、手伝いながら話でもして時間を潰すのが時折俺の趣味とさえなっていた。

他の隊員達はと言うと、フェデリコは主に筋トレ。

一方我々部隊の紅一点、マキハラ少尉はラフな軽装で基地周辺をジョギングしているようだ。

このハンガーの前を、つい数分前も通過して行ったと、機体を専用の機械でジャッキアップしながら、そう整備員が言った。

これだけを聞くと俺は全く運動していないようだが、それはたまたま今日が俺がそうだった運動をしない日であっただけだ、と心の中でそれなりの理由を取り繕った。

俺が整備員の頼みを聞いて、ゴロゴロとハンガーの向こうから新品のタイヤを転がしていると、ハンガーの外から戦闘機らしいエンジンの轟音が聞こえ始め、だんだんと大きくなり始めた。

そこまで来て俺はようやく気付いた。

ここ数ヶ月間、一機も駐機していなかった隣のハンガーの前に、複数の機体が駐機した事を。

明日に行われる米第七艦隊と自衛隊との合同訓練に合わせて、米軍が本土から派遣した海軍航空部隊か？

しかし、そんな大事そうな話は聞いていないぞ。

やがて作業をしていると、エンジンの轟音が止んだ方から4人の人

影が見えた。

そしてその内一人は、ハンガーの中をやや怪訝そうな目で覗きこんだ。

見た感じ、彼と俺はそこまで歳が離れてはいないようにみえる。

「へえ、スーパーランカーにターフーン、それにラプター。

若い新人の癖に、ちよつともったいないんじゃない？ 第一使いこなせるのかい？」

「期待の新人とやらか？ ふむ、予想以上に期待されているようだな」

その言い草に俺は思わず手を止めてムツとなったが、隣にいた整備士がやや緊張気味に敬礼したのを見て、俺は喉まで出かかった反論の言葉を飲み込んだ。

「遠路御苦労様です、キリアコフ中尉！ それにスレイマ二隊長以下、ライジェル隊の皆さん！」

若い方のキリアコフとかいう奴はどうやら俺と一階級差、もう一方の整った顔立ちのダンディーな御仁は大尉だったようだ。

しかしここは民間といえども軍隊。俺も整備員達の少し遅れる事数秒、姿勢を正して彼らに敬礼を向けた。

その理由として彼らが階級が上と言うのもあるが、このM42飛行中隊で最も数多くの戦果を上げるエース部隊として“ライジェル隊”という名前があったのを思い出したからだ。

なるほど、彼らが俺たちが所属するM42飛行中隊で華々しい戦果を上げるエースか、と俺はその場にいた整備員達の反応を見て急に納得してしまった。

「それより、機体が低速時にふらつく！ 明日までにちゃんと整備

をしておけ！」

「はぁ・・・具体的にどの辺りです？」

「それを調べるのがお前たちの仕事だろ！？ 早くしろよ、タイヤくらいコイツにさせとけばいいだろ！」

キリアコフ中尉にキツイ口調で言われ、整備員達がすまなそうな表情で俺に手を合わせて向こうのハンガーへと消えていく。

彼らが扉の向こうに見えなくなるかならないかの辺りで、俺はこっちは任せておけと明るく振舞うように叫んだ。

「全く、これじゃ先が思いやられるよ。 中佐も、なんでこんな機体をお前たちなんか・・・」

「はいはいはい、トーリヤ！ 羨ましがる駄々っ子は、あっちにでも行ってジューズを飲もうぜ！ 俺も喉が渴いたとこなんだよ」

いい加減にキリアコフ中尉の言い草に腹が立つて来た時だ。

彼の肩をグイと掴むと、大柄な短髪の男が陽気にキリアコフ中尉へとそう言いかける。

それを聞いてキリアコフ中尉は、事実を言っているだけだと反論するが、俺から見てもその男とキリアコフ中尉は、まるで大人と子供のようなだった。

多分キリアコフ中尉がやや童顔つてのもあるのかもしれないが、ちよつとした茶番劇を見て俺は少しスッキリした気がした。

そんな彼に追い討ちをかけるかのように、この場に俺が来て欲しいと願っていた援軍が現れた。

「ん？ なんだスレイマ二達か」

「やーれやれ、キリアコフの奴はまた新人いびりしてやがる。」

「エンズリーか、久しぶりだな」

「お前たちこそな。 なんだ、お前たちもこの訓練に参加するのか

？ 新人達には無人機墜の訓練があるが、俺たちやお前たちなら、たーだ飛んでいるだけだと思っけどな」

「本社の意向で仕方なく、だ」

第一戦闘攻撃隊であるレグルス隊のエンズリー大尉達と、第一飛行隊ライジェル隊のスレイマニ大尉達は、M42飛行中隊でもかなり旧知の間柄らしい。

それだけ付き合いも長い割には、この場で心からの笑みや労いの言葉というのがこの両者間には無いようだ。

仲良くは無いのだろうか・・・もし原因があるとしたら、俺はライジェル隊の特にキリアコフ中尉にそれがあつてならないが・・・。

「ええ、そうですね。頼まれないと来ませんよ。 それより良いんですか？ 新人たちは勿論のこと、レグルス隊も無人機墜訓練を受けた方が良いんじゃないですかね？」

「ンあ？ ケンカ売ってんのか、このガキンちよ？」

「いえ。 僕は中尉達のためを思って、そう申し上げただけです」

やや血相を変えたバンクス大尉だが、キリアコフ中尉はそんな彼を嘲るようにあからさまに慥無礼な態度をとり続ける。

キリアコフ中尉が言っているのは、要は俺たち新人に負けを喫するようなエンズリー大尉達は、初心者と一緒に訓練をやり直せという事だ。

俺がバンクス大尉の立場なら、当然ながら同じように怒り、殴り飛ばしたくなるのも不自然じゃない。

というか、信頼する先輩たちを馬鹿にされたようで、現に俺もキリアコフ中尉を出来る事ならぶつ飛ばしたい気持ちにもなった。

だが、そんな俺やバンクス大尉を落ちつかせるように、エンズリー大尉達が前に出て両者をたしなめるよう目線で牽制する。

「一々相手にするな、エディー。それと、キリアコフ・・・俺たちのような兵士じゃ、経験が大事だとスレイマニからも聞いた事があるだろう？ 経験してない奴に、それを語る資格は無い・・・俺が言いたい事が分かるな？」

エンズリー大尉に言い咎められ、キリアコフはやや悔しげに犬歯を無意識のうちに歯がみをしていた。

「アンタレスと戦ってもいないのに、こいつらの実力を知ったように語るなど言っているんだ」

「ハッ、分かりましたよ大尉殿。ならば僕も、アンタレスがどこまで伸びるかに、ちよっぴり期待してますよ」

「それこそ、人の心配より自分の心配をしたらどうだ、キリアコフ？」

俺はエンズリー大尉のその言葉を聞いて、今度は逆だと気付いた。

それはエンズリー大尉達が、攻撃に出るターンだった。

その証拠に、それを言われたキリアコフの表情からこれまで浮かべていた不敵な笑みが消える。

「要はクライヴが言いたいのは、どっかの誰かのように判定撃墜される度に“アイツが悪い”だの“ちよつとしたミス”だの、自分の事は棚に上げて言い訳をする奴に進歩つてあるのかねえと、心配になっただけさ」

「く・・・き、きさ・・・！」

途端にキリアコフ中尉の表情に、赤みが差したようになる。

きつと見事に彼の精神的な弱点を的確に捉えたバンクス大尉へ、“貴様”と言おうとしたのだろう。

だがそれは、キリアコフの前に立ちはだかったスレイマニの、彼を見下ろすような視線で制止された。

「キリアコフ中尉、雑談はこれまでだ。行くぞ、バーフォードの所へ」

「・・・ッ、了解です隊長。」

この場はどうやらスレイマニ大尉の一言で、なんとか事無きを得たが、この先どうなるのか俺としても不安だ。

彼らの姿が見えなくなると、俺よりも先にバンクス大尉が空だった空き缶をエプロンの方へと豪快にけり飛ばした。

俺だっけと二人と同じ気持ちだっただろう。

何かに当たりたかったが、近くにそれが出来そうなものが無い。

そこで俺は奥歯をグツと噛みしめることで、どうにかこうにかその怒りの炎を感じないくらいまでに小さくすることが出来た。

ただ少しばかりの悩みの種が出来た事に、俺はちよっぴり落胆せざるを得なかった。

日が暮れて夕食を終えた俺たちを待っていたのは、明日の日中に行われる合同訓練の最終ブリーフィングだった。

特に新人恒例ともいわれる無人機の撃墜訓練を行う事になっている俺たちは、そのスケジュールや配置から兵装使用の最終確認まで徹底的に確認を受けた。

なんとなく予想は出来ていたが、キリアコフ中尉は始終見るからに退屈そうな表情で背もたれにもたれかかっただらしない格好で座っていた。

一方、彼らを率いている筈のスレイマニ大尉や、最初にキリアコフ中尉を茶化したオルマ中尉にガビリア中尉は終始姿勢は変わらず、

この三人はどちらかと言うとまともな部類の人間らしい。

最後にバーフォード中佐が“何か質問はあるか”と尋ねたが、俺は
ありませんと返事をしたのを聞いて彼はニヤリと笑みを浮かべ、な
らば結構だと返答しその場は解散となった。

ブリーフィングを終えて、俺たちは自室に帰る途中に明日は平常心
で頑張ろうと息を合わせた。
決意を確かめ合うのは良いが、おかげでドキドキして思うように眠
れなかったのはやや痛かった。

|||||

翌日、東から陽光がゆっくりと水平線の向こうから上る頃、エプロ
ンの方で聞こえるエンジン音で俺は目を覚ましてしまう。

早起き組の整備員達が、昼前くらいから俺たちが使うであろう機体
のエンジンを始動させたりして、作動のチェックを行っている。

感謝しつつ、俺はまだ起床時間まで余裕がある事を確認すると、久
々の二度寝に入った。

普通なら寝過ぎしてしまうのが定番かもしれないが、相部屋となっ
ている関係上俺は強引にフェデリコに起こされたので大丈夫だった。

昼の十二時を過ぎ、訓練に参加するMS社の部隊や米軍機までも
が一斉に離陸の手筈を整え始める。

滑走路の方向を向くように、ずらりと並べられた沢山の機体にパイ
ロット達が乗りこみ始めていた。

俺たちの機体も同様に真上に輝く太陽のもと、あちこちにケロシンの
臭いが立ち込めるエプロンに三機が綺麗に並べられている。

今日はハンガーからではなく、エプロンから発進する事になった為だ。

もうここまで来たら、後は口では無く腕で周りの先輩方に言いたい事を言っつてやるうと、俺たちはそう心に決めてコックピットに滑り込んだ。

エンジン始動は俺たちパイロットと整備員が一体となっつて行つた。

彼らの手信号を元に機器を操作し、ほんの数分でタービンの回転は安定。

エルロン・エレベータ・ラダー、フラップ・エアブレーキもチエック完了！

そして整備員達と互いに敬礼を送り合いながら、管制の指示を受けた俺たちは誘導路へと向かう。

俺たちアンタレスの前方には、ライジエル隊の4機が誘導路を移動している。

昨日は見る事は無かつたが、ライジエル隊もホーネットにトナード、ファルクラムにフランカーとバラバラの編成だ。

昨日の一件でやや懲りたのだろうか、フランカーで最後尾を行くキリアコフ中尉を始め、誰も突つかかつて来る事は無いようだ。

コックピットについたミラーを良く見ると、俺の後ろにマキハラ中尉のラプター、そしてフェデリコのタイフーン、そしてその後ろにはレグルス隊。

なるほど、彼らがまた俺たちに何か変な事をしでかさなないように、カッコイイ先輩ありがたい事にピッタリと後ろについて見守っているように見える。

そうこうしているうちに、ライジエル隊が先に離陸。

お次はいよいよ俺たちの番だった。

『アンタレス隊、離陸を許可する。離陸後はAWACSカノープスの指示に従え。初任務の幸運を祈る！』

『サンクス、ミッドウェーコントロール。アンタレス各機、離陸

する。リリース・ブレーキ、ナウ！」

アフターバーナーを吹いて轟くエンジン音を確認すると、俺を含め三機はタイミングを合わせてギアのブレーキを解除。

束縛を解かれたタイヤは瞬く間に猛回転し、凄まじい加速で一気に新幹線の速さを追い抜く。

操縦桿を僅かに引き、フワリと機体が浮いたのを確認して、俺たちは三機の編隊を組んでカノープスからの指示を聞きつつ、訓練の開始を待った。

そして何周目かになる基地周辺の周回を終え、そろそろ午後一時になろうとしていた時だ。

ようやくバーフォード中佐から、準備が整ったらしく訓練開始の指令が下った。

『コールサイン“アンタレス1”、アンタレス隊聞こえるか？ こちらは航空管制機カノープスのバーフォードだ。この間の部隊結成から正式に入社して以来、初の任務となるが・・・君たちの働きには期待している』

「了解です、中佐。ご期待に添えるよう、頑張ります」

『アンタレス、本日無人標的機撃墜訓練を担当します、オペレーターのグレாம்・ハートリーです。よろしく』

聞こえてきたのは、俺とさして変わらないくらいの年齢に聞こえる男の声。

あの前に行く白いAWACS機にのる通信士が、今日の俺たちの任務のオペレーターらしい。

バーフォード中佐以外にも、カノープスには4人のオペレーターがおり、彼らがその時々で順次担当を受け持ちあいながらやっていくという方式だ。

「聞きましたよ、模擬戦では全勝だったそうですね？ 貴方達の担当が出来て光栄です、よろしくお願いします」

「あ、ああ、ありがとう・・・」

「貴方たちには、これから5機の無人標的機を撃墜して頂きます。

まあドイツ空軍の時の事や、模擬戦の戦績も中佐から聞いていますよ。 僕とそう変わらない年齢なのに、とても・・・」

「おい？」

きつとオペレーターとしてパイロットと良好な関係を築くためのコミュニケーションのつもりらしいが、それにしてもべた褒めし過ぎだと俺は思い始めた。

そんな時だ、低い声が割り込みハートリーが口を閉じたのか急に静かになる。

「・・・はい。スレイマ二大尉」

「いつまで説明と雑談を続ける？ 模擬戦といえども任務、それにうちは赤ん坊でも採用したのか？ 新人は一から説明しないと理解できない幼児ではあるまい？」

それを聞いて申し訳ない気持ちになったのか、ハートリーが謝ろうかどうしようか悩んでいると、彼をフォローしにバーフォード中佐が軽く笑いながら割り込んだ。

「ははは、まあそう言うなライジェル1。 確かにそろそろ時間だが、アンタレスの正式な初任務なんだ。 厳かな葬式のようなではなく、少しばかり華やかなムードで行こうじゃないか」

「ふん、まあ良いだろう。 アンタレス、座学は終わりだ。 行け、そしてお前たちの力を示してみろ」

「了解ですカノープス、それにライジェル1。 全力で頑張ります。 アンタレス1よりアンタレス全機、行くぞ！」

『了解!』

『ラジャー! 氣い抜いてると、俺が全部貰ってくぜ!』

バーフォード中佐やスレイマニ大尉への返答が終わるか終わらないかの瞬間にタイミングを合わせるかのように、レーダー上には敵を示す赤い光点。

そしてHUD上には複数の目標となる敵機が、四角のボックスでマークキング表示されていた。

スロットルを調整して無人標的機へ、バイザー越しに肉眼でもハッキリ見えるくらいにまで接近すると、コックピットに鳴り響く電子音がシーカーの作動と目標を捉えた事を告げる。

やがてピーツという音に変わり、HUD上の右下には“SHOOT”という表示まで出現した。

だが、ここでミサイルを使うのはもったいない。

俺たちは傭兵と言う仕事柄、機体だけではなく兵装の使用も給料に影響する。

もちろんかなり割安な値段ではあるが、そういう風に言われているとむしろここぞという時に使おうという見極めの眼力がついて良いかもしれない。

俺が中央に捉えている無人機の他にも、マキハラ少尉やフェデリコのHUD上にも似たような表示がある事だろう。

そしてやがて機影が更に大きくなるくらいまで接近、そしてガンレクテイルが表示されると同時に俺は右の人差指のトリガーを引いた。

30mmの機銃弾が無人標的機のF-4の翼を後ろから前に切り裂き、やがて紅蓮の炎と黒煙を上げてきりもみ状態になったかと思えばタンクに引火したのか空中で爆発して粉々に吹き飛んだ。

『アンタレス1、標的機撃墜を確認! お見事!』

「こっちも終わったぜ」

「アンタレス2、同じく」

フェデリコにマキハラ少尉も俺とほぼタイミングも同時に、無人標的機を撃墜していた。

ハートリーのやや興奮気味の声と、その様子を見て感慨深く唸るバード中佐の声が無線越しに聞こえる。

『よう、アンタレス良い調子だな！』

「ええと・・・貴方は、ライジェル隊の？」

『そうだ！俺はダニエル・オルマ、ライジェル2だ。昨日はウチの四番機がお世話になったみたいだが、一応俺たちはM42飛行中隊の仲間だ。まっ、そこそこ仲良くやろうぜ』

『オルマ！お前や中佐はそう言っているが、経歴からすればアンタレスがこれくらいできるのは当然だ』

続いて聞こえてきた低く太い声は、そのオルマ中尉の隣にいたパイロットだろう。

俺はやたらと身長が高い彼に、幼い頃に感じたような子供から大人に対する恐怖のような物を感じた。

『紹介が遅れたな。奴はライジェル3、ファリド・ガビリア。』

高速戦闘が得意な、猪戦法の達人だ。まあ、戦法柄バカだが・・・ヘッまあ、腕は確かだ』

『バカとはなんだバカとは！訂正しやがれ！』

どうやら近寄りがたい雰囲気をつスレイマ二大尉や、プライドが高過ぎるキリアコフ中尉を除いたこの二人くらいなら、俺たちはどうにかまともに付き合って行けそうだ。

彼らがかわず無線を聞きながら、俺がそんな事を考えている間に、無人標的機の準備も整ったようだ。

「よし次だ」というバーフォード中佐の指示を聞いて、俺たちはリーダーの広範囲に複数の標的機が出現したのを確認した。今度は前方では無く、後方を含めそれぞれの3方向に反応が出現する。

『さあ、第二弾。今度はバラバラだぜ？ どうするよ隊長？』

「散開して各個撃破しよう。その方が時間は早いだろう。アンタレス各機、散開！^{ブレイク}」

『了解。アンタレス2、散開』

『アンタレス3、ブレイク！ 西へ向かうぜ』

俺の機の左右やや後方を飛んでいたマキハラ少尉とフェデリコが、軽く手を振るとそれぞれの方向へと散開した。

一方で俺が狙う敵は俺たちが飛んできていた方向とは真逆。

そこで俺はグイと操縦桿を引いて宙返り。翼が減圧で生じた白い雲の尾を引いて、青空に曲線を描いていく。

内臓が裏返るような感覚を覚えながらも、南方へと向いた機体を左にロールさせて水平に戻すインメルマンターンという、戦闘機動の中ではかなり基本的な機動を使いその標的機の方へと向いた。

向き直った瞬間、対向する敵機が蒼海の向こうから高速で接近するのを俺は肉眼で捉えた。

俺は敵機の上を取りながら、どこを狙うかを少し悩む。

そうしている間にも、敵機との距離はグングン近づく。

やがてレーザーロックの電子音と、程なくして現れたガンレクティルの照準を俺はコックピット部分に合わせて再びトリガーを引く。

20mmよりは重たく遅い連射速度のこのスーパーフランカーの30mm機銃だが、相反してその威力は桁違いに高い。

俺が撃ち込んだ弾丸は、無人機のコックピットに突き刺さると、まるで数トンのハンマーで叩き潰されたように、グニヤリと機首部分が折れ曲がる。

そして空力負荷に耐えられなくなったコクピット部分は、すぐさま折れて空中分解を起こしながら洋上にバラバラに散って行った。

『アンタレス1攻撃、目標に命中、撃墜！』

『良いぞ、アンタレス。ペースも良いし、無駄弾も使っていないようだな』

「ありがとうございます。しかしこれも、これまでの訓練で得た結果ですから」

俺は感謝と同時にバーフォード中佐に返礼の言葉を返していると、敵を倒し終えたマキハラ少尉達が俺の横に戻ってきた。

まさに順調といった具合に、無人標的機の撃墜訓練は進んだ。

しかしそれをやや不快に思ったのか、俺としては聞きたくない声が無線で聞こえてきた。

『アンタレス、もっと早く落とせるだろう？ その程度かい？』

「・・・次に向け、善処します」

『まったく、付き合っているこっちの身にもなってよ！ 訓練なんて、もう良いってのに！』

彼は本当に自分勝手な奴だと思った俺は、心底キリアコフ中尉へ侮蔑の念を込めてとりあえずの返答した。

しかしそれが効いたのか効かなかったのかは定かではないが、彼はどうとうこの訓練への不満さえも漏らし始めた。

きつとコイツはこんな自分勝手な言動から、経験者優先のPMCであるMS社以前に居たであろう軍隊を追い出されたのではと推測し始める。

ともかく俺を始め、俺の話聞いたフェデリコやマキハラ少尉も彼に似たような感情を抱いて、一緒に呆れてくれているのを少しばかり願った。

するとそんな彼のお目付け役である、スレイマ二大尉がいよいよもつて周りの空気を察したのか徐々に口を開いた。

『キリアコフ中尉、我々が民間と言えども軍人である限り、任務は絶対だ。そしてこれも任務だ・・・良いな?』

『ハア・・・了解。』

さすがにスレイマ二隊長には逆らえないらしく、キリアコフ中尉は何度か溜息を吐いてそれ以降大人しくなる。

まあ、あんな文句タラタラな無線を聞いているとヤル気を無くす上に、終いには撃墜したくなるだろうから、スレイマ二大尉の一言が俺たちにとってはありがたかった。

そんなどうでも良い事を考えつつ、俺たちアンタレスはカノープスに続いてライジェル隊後方のレグルス隊、その後ろへとピツタリと付くように編隊を組んだ。

レグルス隊のバンクス大尉から、まあなかなか良かったぜとコメントを頂きつつ、俺はスロットルから手を放して今日のスケジュールを再度確認する。

コックピットの左のスリットのような部分に挟んでいたそのプラン書によれば、これから先は近くの空域で待機する第七艦隊の海軍航空隊と航空自衛隊との合同訓練になる。

つまり、俺たちだけが単独で無人機を撃墜してまわる訓練は無事に終了したようだ。

一応は無様な様子を見せないで済んだ事に、俺は一段落ついたという安堵から重く息を吐き出した。しかしその時だった。

コックピットの中で妙な警告音が鳴り、俺はそれがレーダーの警告音だという事に気付くのに慣れないせいか少々時間がかかった。そんな俺よりも早く、スレイマ二大尉が真っ先に声を上げた。

『バーフォード、東だ！ 東から何かが来ている』
『ん？ 何だこれは？』

疑問の声を上げ始めた中佐や随伴する先輩方に遅れる事、俺もようやく広域にしたレーダー画面に妙な飛行物体が映し出されているのに気付いた。

赤い光点、IFFの応答も無し。だが反応は、戦闘機並みの高速で飛行する航空物体だという事を示している。

ところが、ある程度の国の軍隊のデータベースを備えるカノープスを以てしても、IFF識別不能の文字が出ているだけであった。

しかし、こんな所をうろついている軍隊なんて、一体どこだの国の軍隊だ？

中佐達や第七艦隊の指揮官達がその対応を協議しているうちに、その光点はみるみる近づいて来る。

やがてその国籍不明軍の航空隊が、東から西へ向かってゆっくりと飛ぶ俺たちを追い越した。

なんて数だ、多い！ だが不思議と彼らはこちらへ攻撃やレーダー照射さえしてこない。

『んああ？ なんだコイツら？ 米軍空軍か？』

「いや、違う。それに米軍だったらIFFが識別不能な筈が無い」
『こちらアンタレス2。 機影の中にF-4ファントム、それにB

-52を確認したわ！ でも、どれにも米空軍のマークは付いていない、どういうこと？』

一体奴らの正体は何なんだと、俺たちはありとあらゆる可能性を考えてみたが、F-4とB-52は分かるとしてその編成の中にAJ S-32 Vigggenが混成する空軍というのは、思い当たる物は無い。

ましてや、機体のどこにも国や所属を示すようなエンブレム等が一

切無かつた事が、余計に現場の人間達を混乱させる。

『所属不明機へ！ 繰り返す、所属不明機へ！ 聞こえているだろう！？ こちらは米第七艦隊、ジョージ・ワシントン、貴隊の所属と目的を知らせ！』

『……こちらマーティネス・セキュリティ社、AWAC Sカノープスだ。残念ながら、連中は無視しているようです』

『そうか……カノープス、了解だ。先制攻撃をするようだが、止むをえまい……爆装している不明機を見逃し、どこかで死者が出てからでは遅い。訓練中の米海軍航空隊、ならびにMS社のパイロットの諸君に告ぐ。国籍不明機を可能な限り撃墜せよ！ ただし、投降する機に関しては侵犯機と同じように扱え、良いな？』

いきなり、それも不明機の乱入とそれによって生じた実戦という状況に投入されたと知り、俺は一瞬何が起こったのか分からなくなつた。

それは初実戦となる俺たちや航空自衛隊の多くのパイロット、それに米海軍航空隊の若手のパイロット達も同じような反応だった。

だが幾つもの実戦を経験してきたレグルス隊や、スレイマ二大尉達は至って冷静だ。

そして隊長機がそれぞれに指示を飛ばし、通過して行った敵機を猛スピードで追いかけ始めた。

『バーフォード、奴らは敵と言う事で良いんだな？』

『そういう事だレグルス隊、ライジエ隊、追加報酬は撃墜数に応じて出す……奴らをこの空域から逃がすな！』

『了解した、カノープス。それじゃあ一仕事入ったようだ、行くかエディー』 『了解した』

『ライジエ隊全機。リバース！ 各機、それぞれの戦闘スタイルで敵機を攻撃せよ』

『了解！』 『へっへえ、了解だ！』 『了解。 良いねえ、こんな始まり方は嫌いじゃない！』

これが戦い慣れている先輩たちの飛び方なのか、彼らはこんな状況にも関わらず一糸乱れぬ動きで敵機目がけてまっしぐらに突っ込んで行く。

あっという間に薄い雲の向こうに彼らが消えていくのを俺はじっと眺めていると、通信が入っている事に少し遅れて気付いた。相手はカノープス、バーフォード中佐からだった。

『アンタレス隊、君たちも向かってくれ！ 初任務の訓練中だった事は承知しているが、何分相手は大多数だ。 いかにもスレイマ二達がベテランと言っても、たった6機じゃ心もとない。 君たちも現場に向かってくれ！』

『バーフォード、本気か？ 奴らは今日が訓練を兼ねた正式初任務と聞いている・・・いくらなんでも、前線にリスクを持ちこむ事は避けるべきだ』

それは遠まわしに俺たちは足手まといであり、撃墜される危険性が最も高いと言っているのと同じだった。

もちろん部下思いの上官ならば、そういう考え方もありだと思いが俺は少なくともスレイマ二大尉にそれがあるとは思わなかった。

昨日バンクス大尉達に、“スレイマ二大尉達と一緒に飛びたくない理由”というものを聞かされていたからだ。

その理由と言うのは・・・

『新人たちは下がっていてくれないか？ 僕たちの獲物が減る』

『そうだな。 ついでにお前たちも、慣れていないうちから敵機の群に突っ込みたくは無いだらう。 悪い事は言わん、下がっておけ』

バカにしているにも程がある。

キリアコフ中尉とかいう糞野郎は最初から分かっていたが、比較的まともに見えるスレイマ二大尉にもそんな事を言われるとは！

それにスレイマ二大尉は、おそらく悪意が無い分余計にタチが悪い。俺は左右を見て隣を飛ぶ僚機の反応をみると、二人とも「やってやるう」「任せる」というものだった。

コックピット越しに二人がそう合図をしている。

「バーフォード中佐、カノープスへ。アンタレス隊は、撤退はしません。MS社のパイロットとなった以上、いつ襲い来るか分からない敵との交戦は覚悟の上です！交戦の許可を！」

「うむ・・・そうか、良く言った。では改めて、アンタレス隊、敵性航空部隊を撃墜せよ！」

「ふん、忠告はしておいたぞ。まあ良い、新人部隊・・・アンタレス隊か、足手まといにはなるなよ？」

「ライジェル1、了解です。最善を尽くします」

もう一度鼻を鳴らしたスレイマ二大尉の声が聞こえなくなり、俺たちは彼らが先行している空域へとアフターバーナーONのスロットル全開で猛追を始める。

ずいぶんと戦闘機は先行しているが、大尉達は彼らの中でも鈍足な爆撃機に狙いを定める所だった。

超音速爆撃機と言われるB-1ランサーや東側ではTU-160ブラクジャックあたりでなければ、とても戦闘機の追撃をかわす事など出来やしない。

ましてや大尉達が捉えようとしているのは、ジェット爆撃機の中でも大型で鈍足のB-52だ。

「久々だな、まずはお前から行ってみる」

「良いのかレグルス1？ それじゃあ遠慮なく行くぞ！ SAAM

スタンバイ!」 『了解、S A A Mスタンバイ完了! 射程内です!』
『レグルス2、フォックス・ワン!』

バンクス大尉と息のあった後席WSOが素早く機器を操作していたおかげで、大尉は素早くセミアクティブ方式の空対空ミサイルを放つ事が出来た。

すると爆撃機からは「うわーっ! ミ、ミサイルだあッ!」という悲鳴が上がり咄嗟に回避行動をとり始めるが、鈍重な機体が満足な回避が出来るワケも無く、バンクス大尉の放ったミサイルは右翼のエンジン付近に突き刺さって火球を発生させる。

右主翼が根元から折れたため、バランスを失いながら回転しつつ落下して行く機体。

通信では敵パイロットの悲鳴が聞こえ、やがて黒煙に包まれたB-52が海面に衝突し没するのと同時に無線は途絶えた。

爆撃機を一機撃墜された事で、それまで俺たちを素通りしようとしていた敵機はそうも行かないという事を知る。

混線する敵の無線が、妙に慌ただしくなったのが現場に高速で駆けつけている俺たちにも聞こえていた。

『爆撃機がやられたぞ!』

『くそっ、俺たちの目的がバレたか!?』

『止むを得ん、戦闘機部隊の半数は残れ! 奴らを足止めしろ!』

爆撃機をこれ以上失えば、作戦に支障をきたす!』

爆撃機を守ろうとしている、やはりどこかを爆撃するつもりか!? それにしても、作戦とは一体何だ!? 本当にコイツら、何を考えているんだ!? お前たちは誰なんだ!?

敵機と認識せざるを得ない相手に、俺は思わずその疑問を叫びたい所だった。

しかしその行く手を通せんぼするように、敵の戦闘機部隊が反転し

て俺たちを迎え撃つ態勢をとる。

やがて射程距離にまで迫った時、今度は敵の方からミサイルが放たれた。

数機が一斉に放ち、何本もの白い筋を描いてこちらへ迫ってくる。そのうちの一発が、フェデリコを狙っているらしい。散開したフェデリコへ、ミサイルのラインが伸びていく。

『アンタレス3、ミサイルだ！ 回避！』

『はいよ！ 言われなくても・・・よつと！』

飛び上がるような挙動のバレルロールで、華麗にミサイルを回避したフェデリコをみて俺は思わず安堵の息を漏らした。

すぐさま反転し、宙返りして逆さまのまま俺はフェデリコを追撃しようとする敵機のケツを真正面に捉える。

先程のF-4は無人標的機だったが、今度は同じ機体のように見えて中にはちゃんと生きた人間が座って操縦している筈だ。

俺たちと生物学上はなんら変わらない 同じ人間が！

だがそうこうしているうちに、その機体は複数の機体に狙われているフェデリコのタイフーンの後部を捉えようとしている。

奴の機体がフェデリコにレーダー照射からレーダロックを仕掛けようとしているのを見て、俺は迷いを払拭した。

確かにフェデリコはお調子者で、ナンパ野郎だが 無慈悲にお前たちに殺されるべき人間じゃない！

急旋回で体にかかると格闘しつつ、それでも俺は徐々に距離を詰めてくる敵機の後部を見失わないように凝視する。

そしてフェデリコ機を追いかけまわす事に夢中の敵機にレーダロックをかけた。

ようやく自分が狙われている事に気付いた敵機だが、それに気付いた時にはもう遅かった。

機銃とは違い、既に俺は操縦桿を握る手の親指でボタンをプッシュ。

オレンジ色の炎が噴き出し、前方に飛んで行った空対空ミサイルがあつという間に敵機に追いつき、回避行動をとるため海面の方へと機体上部を向けていた敵機の後部を吹き飛ばした。

エンジンを吹き飛ばされた機体は、少し高度を下げたかと思えば燃料に引火して大爆発を起こし、文字通り空の塵と消えたのだった。

その様子を命中から爆発までを見ていた俺は、キャノピーからパラシュートが打ち出されなにかと言う一握の希望を抱いていたが、その希望も同時に散りと消える。

爆発の瞬間、思わず俺はその光景から目を反らしていた。

『アンタレス1が敵機を撃墜した。』

「あ、ああ……ありがとうございます」

『どうしたアンタレス1？』

「い、いえ……その、なんでもありません」

『ああ、そうか……君は、これが“初めて”なんだな。だが、これが我々が生きる本来の場所だ。今は割り切って欲しい』

言葉は悪いが初めて“人殺し”を経験した俺に、それを察したバーフォード中佐が優しく声をかける。

しかし、だからと言って今更無抵抗宣言する事も出来る筈が無いし、やったらやったでさっきの敵機の末路を自分が辿るようになるだけだ。

中佐の声に元気づけられたように、俺やマキハラ少尉やフェデリコもミサイルやガンアタックで襲い来る敵機を撃墜する。

だがそんな俺たちのペースよりも早く、レグルス隊やライジェル隊はより多くの敵機を紅蓮の炎と黒煙に染め上げていた。

それこそ野獣の獅子のごとく、偉大な戦士のごとく。

やがて敵航空部隊を壊滅寸前まで追い込む中、俺は彼らが意図的に脱出できる筈の機体から脱出していない事を悟った。

何故だ？第二次大戦時の日本の兵士たちのように、屈辱の捕虜より

も敢えて誇り高い死を選ぼうと言うのか？それとも・・・
その時、俺はレーザー照射された事とすぐ横を数本の火線が通り過ぎていき、咄嗟に機体を右へ傾けて回避行動をとった。

「まだやるのか！？ くツ、お前一機で何になる 悪い事は言わない、降伏しろ！」

「くくく、降伏だと？ バカを言うな、我らヴァラヒア軍人に予め設けてる退路など無い！」

「ヴァラヒア、だと？ くそツ、ヴァラヒアとは何だ！？ 答える！」

だが俺の上に陣取った敵機はそれに答えることなく、上から俺の拳動に合わせて逃がさないように動く。

俺が高Gターンをもって回避しようとしたその時、敵機から悲鳴が上がったと思えば、その機は瞬く間に炎に包まれた爆せて空に散った。

『アンタレス2、敵機撃墜。 アンタレス1、大丈夫？』

「ああ、大丈夫だ。 すまない、マキハラ少尉・・・助かったよ」

俺の後ろから隣にピタリと編隊を組んだマキハラ少尉、それにフェデリコが手を振っている。

二人とも生きているようだ・・・良かった。

敵機の反応が消失したのを、俺たちはもとよりカノープスも確認した。

爆撃機や多数の戦闘機を逃がしてしまった事は痛いけど、それでも戦闘機の半数を撃墜したというその結果にはとりあえずの満足の意を表していた。

しかし彼らの目的が知りえない以上、逃がしてしまった敵機の事が気になってしょうがなかった。

あいつらがやるうとしている事は何だ？ それに、“ヴァラヒア”とは……？

その時、カノープスから通信が入り、俺たちはその内容に驚愕した。

『全機、落ちついて聞いてくれ。 奴らの先遣隊が、日本の航空自衛隊の硫黄島基地を急襲したと情報が入った。 おそらく既に硫黄島基地は、奴らの手中に収まったと思われる』

『硫黄島だと？ まさか、奴らの狙いは!!』

レグルス1、エンズリー大尉が考えついた事も、俺たちがまさかと思つた事は同じだったに違いない。

『そのまさかだ！ 奴らの目的は、日本の東京。 敵は日本の首都東京を襲撃するつもりだ!』

スレイマニ大尉達は自分たちの戦う目的が増えて喜んでいるだろうが、俺たちはとてもそんな気では居られなかった。

こんな急襲を経験した俺たちはきつと戦争が始まるのだと、その事実にならず恐怖心を抱いていたからだ。

ついに斧が泉に投げ込まれ、運命の歯車は回りだした。

そしてそれは止まらない。誰かが金の斧を得るまでは……

Sortie 3 : Steel Axe (後書き)

本当はもう少し書きたかった戦闘シーンですが、ただでさえ多めの文量という関係上、これくらいが良いかなと思いますQAAMを使えと搭載していない機でも言われるあたりのシーンはカット。
次回は少しは戦闘がメインになるかと思えます。

それにしても、ラプターより速いB-52って何ぞ???

Sortie 4 : Bird Hunt (前編) (前書き)

東京襲撃の前編です。

読まれた方は、是非感想をお願い致します。
執筆の参考や、なにより励みになりますので(笑)

Sortie 4 : Bird Hunt (前編)

昨日の訓練が終わってからというもの、飛ぶ前の搭乗員が屯すべき搭乗員待機室は、訓練から帰ってきたばかりのパイロット達でこった返していた。

あの襲撃者達の事が気になって、中にはずっと廊下の辺りをうろろろとする者や、逆にベテランはそんな彼らにうろちよろするなと声をかけたり、じつとまるで達観しているような立ち振る舞いを見せていた。

別命あるまで待機という命令を受けて、俺たちは搭乗員待機室や食堂で食事や仮眠をとる。

未だにあの時の感覚が忘れられないためか、それともあの襲撃者達の事が気になっていいるせいか、異様に時の流れが早いと感じた時には、時計はもう真夜中を示していた。

そして事件発生から丸一日が経過しようとしたその日の早朝、ついにその指令は下った。

例の国籍不明軍が、ついに東京侵攻を開始。

事態を重く見た日本政府は有事関連法案の適用と、新安保条約に基づいた米軍への応援を要請した。

そして米軍傘下戦力としてカウントされている俺たちも、必然的に呼びがかかる。

戦力の規模こそ大したものではないが、今東京へ数時間内に駆けつける事が可能な戦力として考えれば、俺たちの数というのも決して少なくなかった。

ましてや、足の遅い艦船が機関全速で向かってても一週間とかかかるような距離なので、必然的に航空戦力のみ派兵となる。

しかし俺たちがそんな事を憂いても何も良くなるわけではない。

むしろ事は時間が経過することにどんどん悪くなっていく。

最低限のブリーフィングを受けた俺たちアンタレス隊は、空対空ミサイルを最大まで補給した機体に飛び乗りエンジンを始動させた。そして昨日の訓練と同じように、先行するカノープスやライジエル隊に続いて一斉に離陸。

俺たちアンタレス隊をやや後ろめの中央にして、M42飛行中隊は針路を西へ一路東京へと向かう。

思うように体を休める事が出来なかったのと、待機中の姿勢が悪かったらしく俺は何度かコックピットの中で体を伸ばしたりを繰り返した。

そして俺たちの後方から昇って来た朝日は、今ではもうかなりの高さまで昇っている。

東京までのETAがあと二時間を切った頃、カノープスのモニターがバーフォード中佐の目に異様な光景を見せていた。

『・・・なんだ!? 一体これは?』

『し、CG・・・ですよ? こんな大きな機体、実在するわけ・・・!』

バーフォード中佐とオペレーターのアンデション伍長が、何かを見たのか思わず声を上げた。

その声が微かに・・・いや、確実に分かるほど震えている。いや、彼らだけでは無い。

混線してくる米空軍のAWACSからも、同様に驚きの声や今まで陽気に喋っていた管制官が言葉を失う様子がそこらじゅうで起きていた。

一体何事かと俺たちが気になりだした頃、中佐が俺たちに事の詳細を説明した。

『M42飛行中隊の全機へ、東京上空に巨大な航空機が出現した。』

翼長、数百メートルはありそうな、黒くて巨大な・・・機影だ』

「幅数百メートルだって？ 本当かよ！？ なあ、アーレックよお、お前も何か言えよ！」

「俺だって信じられないが、でも中佐が嘘について何のメリットがあるんだよ？」

「そ、そりゃあそうだが・・・」

「すまない諸君。だが、私にもこのモニターの光景を形容する言葉が見つからない・・・！」

こんな時にマキハラ少尉にも何か言ってもらいたかったが、彼女もその知らせに言葉を失っていたようだ。

それはカノープスやアンタレス隊だけではない。レグルス隊もその他東京へ向かう大勢の群翼のEース達も、異常中の異常な事態の発生を感じていた。

「聞いたかよクライヴ、巨大な航空機だってよ。ひよつとしてUFOか？」

「なんだ、俺たちの相手は宇宙人か・・・。おいエディー・・・。確か、レーザーの発射口が弱点だったよな？」

「へっ、インディペンデンス・デイか？ まあ名作だが、俺としてはホーネットしか出なかったのが残念だったな」

「おい、レグルス1、レグルス2、私語は慎め。つたく、冗談では無いんだぞ？」

「分かっているさ中佐。でも、そっちだってまだ巨大な航空機としか分かってないんだろ？ だったらイメージトレーニングでもさせといてくれ」

「まったくエディーそれにクライヴ、お前たちと来たら・・・」

まあ良い、こちらが新情報を伝える時には絶対に静かにするように」

レグルス隊の二人の会話を聞いて、疑心暗鬼で大きくなり始めていたその巨大航空機という存在への恐怖が、どうにかやわらぎ始めた。

きつと二人はそんな効果がある事も知らずに、戦闘に向かう時はいつも二人でそういうやり取りをしながら気を紛らわせていたのかもしれない。

俺はフェデリコに、どうせお喋りなんだったら彼らのようになってくれと心の中で願った。

その時リーダーが何かを捉え、いよいよ始まるかと身構えた俺だったが、表示されたのは友軍を示す青いマークだった。

『こちら航空自衛隊、空中給油部隊第404飛行隊です。MS社M42飛行中隊、聞こえますか?』

『良く聞こえる、感度良好だ。こちらM42飛行中隊空中管制機カノーパス、バーフォードだ。話は聞いている、自衛隊日本政府の厚意に感謝する』

『いえ、こちらこそ応援感謝します。・・・時間がありません、給油を開始します』

『了解した。まずはライジェル隊、前方に自衛隊の給油機がいる。接近し給油を行え』

『ライジェル1、了解した。各機、手早く済ますぞ』

前に出たスレイマ二大尉達の機が、前方に数機並んで飛ぶKC-767の編隊へと向かう。

それに続いて残り3機も彼に続くように、前方を悠々と飛ぶ給油機へと加速して行く。

空中給油機の所属は中部地方の基地だったが、そこから今俺たちが飛ぶ遙か太平洋上まで出張ってくれて来ていたのだ。

先程からリーダーに映り、そして今もう俺たちの前方に見え始めた機体がそれだ。

下に伸びたパイプに戦闘機の給油口が接続され、これから作戦を迎えるにあたって十分な燃料を供給する。

その様子を少し離れた所から見ていると、不意に無線のコールが鳴

った。

次は君たちだと言うバーフォード中佐からの指示を受けて、順番がきた俺たちは前へと進み出る。

戦闘機に比べると大きな機体の真下に視線を向け、真下へとゆっくり入り込むように俺は機体を微調整しながら進める。

目の前には、機体から垂れ下がった先が漏斗状になったホース。

その真後ろへと来ると、俺はスイッチを操作してコックピットの横に給油口が備わったパイプを伸ばす。

後は、微調整をしてその中に差し込むだけだ。

『あと少し、前に接近。 やや右へ・・・ストップ、そのまま前へ』

スロットルを少し押し込むと、ガコツという音が聞こえて給油機と自機が給油パイプで繋がった。

誘導をしながらそれを確認したオペレーターが、俺の機体へと給油を開始する。

残燃料メーターが勢い良く上昇し、ほんの数分も経たないうちに燃料は満タンとなった。

オペレーターの合図を受けて機体を僅かに後退させると、スルツと抜けるように給油口が離れる。

『よし！ 給油完了、行って来い！ こんなことしか出来ないが、俺たちの東京を、生まれ育った国を頼んだぜ！』

「こちらアンタレス1、了解だ。 給油ありがとう、最善を尽くす」

俺が給油機から離れると、給油を終えた僚機が次々と戻ってきた。そして程なくして、いよいよ海をぐるりと取り囲む陸地が見え始める。

だがいつもなら往来する船舶や、付近を飛ぶ旅客機の一機や二機は見えてもおかしく無いのだが、その姿が無い事が俺たちに東京で異変が起こっていると言ふ事を始めて視覚で感じさせてくれた。

『まもなく敵部隊との交戦圏内だ。各機、油断するな！ それと・・・』

中佐が何かを言おうとして黙り込む。

そういえば、さっきから気になっていた・・・巨大航空機って一体何だ？

その時、コックピット内のレーダーが何かを捉えたという警告音を放つ。

コンタクトを知らせるレーダーに目を通すと・・・いたいた、IF F 反応無し国籍不明機、いや破壊活動を行う敵性航空部隊だ。

先手を打とうと、早くも俺がその敵機群にX L A Aのレーダーロックをかけようとした時だ。

そのレーダーに俺は、これまでは見た事も無いような反応があるのを確認した。

それを見て、俺や同じような戦法で先手を打とうとしていたフェデリコは言葉を失った。

反応が大きすぎる・・・しかしその反応は、それが確実に一定の速度で空を飛んでいる事を示していた。

そしてやや霞んだ東京の空の中に、それはゆっくりと自身を溶け込ませていた空から姿を現す。

「何だアレ？ 航空機、なのか・・・？」

『なんて大きなの・・・高層ビルが、あんなに小さく見えるなんて！』

『おいおい、冗談はよしてくれ！ あんなものと戦うなんて俺は聞いてないぞー！』

俺たちが見たのは、東京上空を飛ぶ巨大な黒い影。その影がミサイルや弾丸の死の雨を降らせながら、我が物顔で大都市の上空を飛行している。

巨大航空機が真下にある赤いタワーを通過するが、そのタワーよりもその機体の翼長の方が遥かに長いように感じた。

だがアメリカ滞在中に観光雑誌で得た俺の記憶が正しければ、あのタワーの名前は“東京タワー”、高さはアメリカが誇る原子力空母ニミッツ級の全長と張り合う333mだった筈だ。

それが巨大航空機との対比の関係で、あんなに小さく見えると言う事に俺たちは驚きを隠せなかった。

巨大航空機の容姿は、まるでSF映画に出てくるような宇宙人の乗り物のようでもあった。

するとその時、その後部が光りだした。

レーザーのような一筋の光ではなく、まるでその部分が白熱しているような光だった。

『エネルギー増大！　なんて高熱だ・・・鉄も溶けだすぞ！』

『奴ら、一体何をやる気だ！？』

バーフォード中佐達が疑問の声を上げ、更なる分析を進めようとした時だ。

白熱していた部分とは反対側の、機体の前方から一筋の何かが猛スピードで飛んでいく。

そしてその飛んで行った何かが、大渋滞の都市高速道路がある埋め立て地へと突き刺さる。

次の瞬間、爆炎が舞い上がり衝撃波がそこから空中へと広がっていった。

その轟音を纏った衝撃波は、はるか遠方を飛ぶ俺たちの機体にも襲いかかった。

ドシンと上下に揺さぶられる地震のような揺れに、俺は操縦桿やスロットルをしっかりと握りしめてそれに耐えた。いくら日本が地震が多いとはいえ、空中にいる俺たちまでその影響を受ける筈なんて無い。

原因は間違いなく、奴が放ったあの光。

程なくして機体が落ち着き、その光が飛び込んで行った場所を見て俺は目を見開いて言葉を失った。

ぼっかりと、まるで核兵器が炸裂した跡地のようなクレーターが出来ていた。

クレーターの一部は海と繋がっており、そこから早くも海水がごうごうと入り始めている。

そこを通っていた筈の高速道路は跡形も無いばかりか、その高速道路を支えていた基礎部分から根こそぎ消滅していた。

当然、その高速道路にいた車ごと多くの人命が失われたのは火を見るよりも明らかだった。

『なんて奴らだ・・・あそこには基地も、部隊もいないんだぞ!!』

『それなのに!!』

『外道め! ちくしょう!』

混線する無線からは、陸上自衛隊や東京湾に展開する海上自衛隊の艦艇から、巨大航空機の非情な無差別攻撃に憤慨する声が聞こえる。それをあざ笑うかのように、悠々と飛行を続ける機体はゆっくりとした左ターンをしながら、また別の方角へと向かう。

『M42飛行中隊の全機へ・・・信じられないかもしれないが、あの一撃といい敵はまるで航空要塞、それも特大のだ。だがこれ以上、奴にこの東京上空を飛ばせるわけには行かない』

『レグルス2、同感だ。これ以上、あのセンスの悪い巨大海パンを見てるだけでも反吐が出そうだ。さっさと落としまおう!』

『ああそつだ。それから、先程の主砲による攻撃のデータから、次の発射タイミングをある程度まで特定する事が可能となった。奴がまた電力をチャージしようとする兆候を捉えたら、全機ヘDEXを送る。頼むぞライジエル隊、レグルス隊、それにアンタレス隊……これ以上奴らの好き勝手にさせるな!』

『了解だ。ライジエル隊全機、行くぞ。大きいだけで、ただの航空機と思え』

一歩間違えればスレイマ二大尉の発言は油断だが、歴戦の猛者がそういうと俺も妙に納得してしまう。

スロットルを押し込んで接近していく俺たちのHUD上には、対空機銃や対空ミサイルの発射口が記されていた。

多い、なんて数だ! 一体どれだけの数の地上部隊を集めれば、あれだけの兵装が揃うだろうか……。

HUDに入りきれないくらいに大きく見え始めるくらいまで接近すると、無線が混線し敵軍の……おそらくこの航空要塞のクルーらしき男達の声が聞こえてきた。

『……増援のようだ。だが、たかが戦闘機如き、この“スピリダス”の敵では無い……戦意を失わせるには、まだ足りないよつだな。おい、もう一度だ!』

『了解! バラウール、次弾装填! 蓄電を開始します!』

指揮官らしき男の声は、背筋がゾクツとするほど冷たい声だ……その声の奥から狂気じみたような言葉が聞こえてくるのも、尚更恐ろしい。

まるで何かに取りつかれたような……でなければ、こんな狂ったような所業は出来ないだろうとも思える。

その時胴体後部から、またあの光が見え始めた。

マグネシウムが燃焼して発光しているような、あの死をもたらす光

だ。

それに合わせたように、中佐が無線で吠えた。

『来たぞ！ また撃つつもりだ！ 全機、ミサイルを撃ち込んでやれ！ 二度と撃たせるな！』

『アンタレス1、フォックス2！』

俺は景気良く一度に二発のAAMを放つと、俺だけじゃなく後ろからは友軍が放った無数のAAMが白糸のような筋を描いて光の中心へと吸い込まれるように消えて行った。

連続でAAMを食らい、流石に無事では無かったのだろう。

スピリダスとかいう航空要塞の後部で禍々しく輝いていた光が収まった。

それを見て俺たちは発射を阻止できた事を確信し、安堵のため息をマスクの中に吐く。

『スピリダス、後部排熱部に被弾！ 主砲バラウール発射不能！』

『ええい、蓄電池が一つやられたか！？ ならば予備の蓄電池を機動、もたもたするな！ 対空兵装は何をしている！？ さつさと戦闘機を撃ち落とせ！』

『了解、再蓄電を開始！』

『兵装、第二ブロック展開します！』

ザコと踏んでいた俺たちに、発射を阻止されたせいか指揮官の声に焦りが含まれているように感じた。

確実に追い込んでいる・・・そう俺が確信した矢先、再びあの光がスピリダスの後方で輝き始める。

性懲りもなく！ 俺はより破壊力の強い長距離対空ミサイルXLAに切り替えて、今度こそ非道な攻撃を止めようとレーザーロックをかける。

だがその時、俺と同じかそれよりも相手が早かったか・・・レーダーロックをかけられているとコックピットの警告音が告げ始めた。タイミングを合わせるようにHUD上で増えた反応、スピリダスの上翼部で展開した対空ミサイルがそれであると気付き、俺は咄嗟に操縦桿を倒した。

『アンタレス、ブレイク！ A A Mだ！』
『ぬぐぐッ！』

それぞれバレルロールや急上昇を駆使し、強烈なGが加わる僚機からはうめき声に近いものが聞こえる。ミサイルアラートが通り過ぎ、どうにか奴の攻撃を回避する事が出来た。

『アンタレス、前に出るのは自重しろ。 まだ、お前たちは慣れていないのだから・・・』

『す、すみません・・・スレイマ二大尉。 以後、気を付けます』

と答えつつも、だからと言って逃げる気など毛頭ない。スピリダスの前方、攻撃位置とは反対側に出してしまったが、俺はどうすればいいかを悩む。

そこへ俺同様に諦める気など無いマキハラ少尉が、俺たちにある提案をしてくれた。

『アンタレス2からアンタレス各機。 今の攻撃、私には来なかったわ・・・これを利用すればきつと！』

『そうか！ マキハラ少尉はステルス機、レーダーではよほど接近しない限り捉える事は出来ないのか！ それなら、良い事を思いついたぞ！』

『なるほどね。 俺にも、なんとなくわかり始めた』

マキハラ少尉が考えついた事は、至って単純。

ステルスではない俺たちがスピリダスの両サイドから圏になり、ミサイルの狙いを引きつける一方でマキハラ少尉が対空ミサイル群を破壊すると言ったものだった。

成功するかしないかは、やってみなければわからない。

オマケに迷っている時間が無い事は、カノーパスからもたらされるスピリダス主砲のカウントダウンで承知済みだ。

その照準が向けられている先には、まだ避難を終えていない市民たちが逃げ惑う市街地。

着弾すれば数百、下手すれば千人単位の犠牲者が……！

『アンタレス全機、仕掛けるぞ！ ブレイク！』

その合図と共に俺とフェデリコはスロットルを押し込み、スピリダスの左右に広がるように飛んでいく。

まるで壁のように巨大なスピリダスのウィングレットを通過すると、コックピットに電子音がビツビツビツと鳴り響き、俺にレーダーロックされていると告げる。

そしてすぐさま鳴り響いた、ミサイルアラートだ！

右足でラダーペダルを思いっきり踏み込むと、左に倒していた機体がグンツと上を向く。

跳ね上がるようにして上を向いた機体を傾がしつつ、下へ向かって螺旋状にバレルロール機動を駆使、どうにかミサイルを振り切ったようだ。

次弾が来ないかと俺は心配になり、水平に戻した機体の後方へと目を向けると、その不安は瞬く間に拭われた。

スピリダスの黒い上翼から、同じく黒い何かが伸びている　　黒煙だ！

『敵航空要塞の対空ミサイルを破壊！ アンタレス隊、よくやった！』
『アンタレスが活路を開いた！ 今だ、ありったけ撃ち込んでやれ！ レグルス1、フォックス1！』

バーフォード中佐が敵航空要塞の対空ミサイルが沈黙したのを好機とみると、それを狼煙と受け取ったパイロット達が一斉にロックを掛けてトリガーを引いた。

機体から切り離されたミサイルが、オレンジ色のプラストを吹きながらスピリダス後方で輝く排熱部へと突き刺さった。

その瞬間、先程とは違う手応えがあったのを俺は感じた。

多数のミサイルが命中した箇所から黒煙が上がり、さらにボンボンと誘爆まで二度三度と起こした。

内部で明らかに何かが爆発したようだった。

『後方排熱部、被弾！ 船体後部ブロックで、誘爆が起こっています！』

『こちら第二艦橋！ 予備蓄電池にダメージ！ 有毒ガスが・・・』
『うわあああああつー！』

無線で悲鳴が上がるのと同時に、被弾部から紅蓮の炎が噴き上がり堅牢だったスピリダスの装甲を内側から突き破った。

今までにないような強烈な爆発で、俺はスピリダスの主砲が発射不能になった事を悟った。

『主砲管制システムにエラー発生！ バラウール、発射できません！』

『ええい、何をしている！ エラーの発生くらい修正出来んのか！』

この機体は、ヴァラヒアが誇る無敵の航空要塞スピリダスなんだぞー！ー！』

『む、無理です！ 蓄電池が全て破損！ 蓄電が出来ません！』
『艦内でさらに延焼中！ 第二艦橋も通信途絶、誘爆も多数起こっています！』

指揮官が湧きあがる怒りを押さえこむように、低く唸り声を上げているのが無線で聞こえた。

とにかくあれでもう、地面にあんなクレーターをほがすような攻撃は出来ないだろう。

しかし、スピリダスはあれだけの爆発を起こしておきながら、未だに空中を浮遊するように飛び続けている。

主砲が沈黙したとはいえ、まだ通常兵器の類による攻撃能力は未だに健在だ。

そこでさらに攻撃を加えようとした俺たちだが、その時カノープスが不穏な影を捉えた。

『カノープスよりM42飛行中隊全機へ。北より航空機、例にもれずまたIFF応答無しだ。全部で五機、速いぞ！』

Sorties : Bird Hunt (後編)

『なに？ ほう……そうなのか？』

無線から聞こえてきたのは同胞たちの勝利宣言ではなく、久々に男を奮い立たせるに十分な内容だった。

元々戦闘機を小馬鹿にしていたいけない大艦巨砲主義者が、空を飛ぶ事に男は少しばかり苛立ちを覚えていただけにその報告は彼をかえって喜ばせた。

奴らのバックアップに向かわされた事で男のイライラ感は一層に増していたのだが、本部から航空要塞がやや劣勢に立たされていると聞いて、味方がやられているというのに男は何故か上機嫌。

無線を切り周囲を見渡すと、彼にとっては初めて訪れる極東の島国が眼下には広がる。

その彼が操るのは灰色塗装のSU-47ベルクート。

そして彼を中心に、既に日本の領空を同じ機体だけで編成された五機の編隊が行く。

尾翼には牙を持った骸骨のマークが描かれており、それだけでも近寄りやすい雰囲気は敵は勿論のこと味方にも与えるには十分だった。

しかしそのマークよりも何より友軍にも近寄りやすい雰囲気を与えているのは、彼らがヴァラヒアの誇る空の精鋭達だという事実だ。

これまで数多くの戦場に傭兵として参加した事もある彼らだが、自分たちが最も信頼する隊長がここまで上機嫌になったのは、本当に何年振りか……。

それに前回は酒が入っていた為だが、今回はアルコールなど一滴も入っていないにも関わらず、スピリダスが苦戦したと聞いた瞬間彼の声のトーンが変わった。

真意を確かめようと、長らく彼の二番機を務めてきたアルチバシエ

ツフ中尉は隊長へと尋ねた。

『ダリステイン少佐、やけに上機嫌ですね？ あの狂信者達が慌てふためいている事が愉快なのは分かりますが、あんまりやり過ぎると睨まれるのでは？』

『その心配は無いぞ、ヴコドラク2。確かに、あの馬鹿供に良い薬が見つかったのは微笑ましい事だが、それ以上にあの国にそこまですぐの奴が居たとは驚きなのだよ』

ヴコドラク1、ユーリー・ダリステインの記憶が正しければ、日本は国家として最後に勇ましく戦闘を行ったのは、およそ70年前だったと記憶している。

それで降まるで牙を抜かれた獣のように、戦う事はせずにそれに必要な道具は買い揃え、そして言うだけは一丁前な事を言う口だけの遠吠え国家になり下がった。

だがいざ戦いが始まってみるとどうだ 無敵と謳っていた航空要塞スピリダスが苦戦とは。

その時、本部からの通信を聞いたアルチバシエフからダリステインへと連絡が入る。

それを聞いて再び彼は眉間にしわを寄せた。

「なに？ 第七艦隊の戦力に、PMC（民間軍事会社）つまり傭兵か？」

呆れた やっぱり彼らは遠吠えしかしていない。いざ危機に晒されると、親分に守ってもらおうしかない。

しかもその親分が引きつれているのは、金を得るために自らの誇りまでを差し出したという蔑むべき奴らだ。

だが本来はそうなのだが、それではあのスピリダスをあそこまで追い詰めるという事に、彼は感情的に納得が行かなかった。

そんな奴らが、そこまでの活躍が出来る筈が無い　　せめてそう
思いたかったのだ。

「なるほど・・・案外傭兵というのは奥深いのかもしれんな。ま
あ良いだろう、ヴゴドラク全機これより臨戦態勢をとる・・・我に
続け！」

『了解！』

|||||

あと少しだというのに！

敵機を撃墜しつつ黒煙をもうもうと吐きだすスピリダスを目前に、
カノープスから敵増援の知らせを受けた全機のパイロットがそう思
った事だろう。

カノープスのレーダーに映った時には、その五機はかなり接近して
いた。

それも低空を猛スピードで駆け抜ける様は、まるで平野を疾走する
猛獣のようでもある。

『見る！　友軍の増援だ！』

『ヴゴドラク！　増援はヴゴドラクだ！　ざまあ見るPMC、くた
ばりやがれ！』

五機の到着を知った敵部隊が、打って変って勢いづく。

まるで英雄が到着したかのように、彼らの戦意が極端に高揚したの
だった。

その無線、そしてレーダーに映る彼らの機影が敵地のど真ん中だと
いうのに一糸乱れぬ編隊飛行をしているのを見て、俺は彼らの姿に
一瞬だけ恐怖心を煽られそうになった。

彼らが放つ威圧感はそのスピリダス、それにも勝るとも劣らないようにさえ感じる！

『ヴゴドラク1よりヴァラヒアの全機、スピリダスの離脱を援護する。各機続け！ 奴らを足止めする！』

『こちらカノープス、敵増援機が来るぞ！ 各隊、散開し応戦せよ！』

リーダーらしき男の声が聞こえ、眼下では五機のベルクート編隊がパツと広がるように散開。

それに合わせて俺たちも散開すると、すぐ横を数本の火線が掠めるように通り過ぎた。

攻撃のタイミングが早い上になんて正確さだ！

すぐさまターンに入ると、俺の頭上にあのベルクートの機体が迫る。ガンアタックをしかけられたが、幸いにも銃弾はすぐそばを通り過ぎて俺の機体に命中する事は無かった。

『ふふふ、まだ甘いな・・・若いせいかな、それとも傭兵だからか？』

「な、なん・・・だと？」

『命を呈してまで守る価値を持たぬ者には、持つ者からすれば決定的な違いがある・・・それをお前たちに教えてやるわ』

『場合によっては、“命”という授業料を払ってもらおう・・・』

隊長と彼とタッグを組んでいる別の機が、翼端からベイパーを引きながら急旋回をしかける。

前面に捉えた彼らの機体は並列して飛ぶと、俺たちが追いかけていたのを見計らって左右へ分裂。

急激なターンには追いつけないためエアブレーキを展開してターンのしかかるGでシートに体が張り付けられるも、それでも俺はHUD上に捉えた隊長機を見逃さないように操縦桿を引き続ける。

それにしても軽快な動きを見せる機体だ。

前進翼とカナード翼を持つこの機体は、高速時の旋回性能ならばラプターと互角かそれ以上とも言われている。

だが一番驚くべきは、それによって発生する強烈なGに耐える事のできるパイロットの方だ。

最大で9〜10G、つまり彼らは地上の9倍から10倍の重力が加わるのに平気で耐える事のできるパイロットだというのだ。

これには歴戦のレグルス隊やライジェル隊も苦戦を強いられ始めていた。

加えて例のごとくキリアコフ中尉は、相手がたった二機であるというのに自分たちが防戦一方であるという事に苛立ちを露わにしていた。

『くツ・・・機体の性能が良いからって、図に乗らないで欲しいな！』

『その程度の腕しかないアンタには、その程度の機体がお似合いよ』
聞こえてきた女性の声を聞いて、キリアコフ中尉が憤慨する声が聞こえる。

どうやら敵のエース部隊には、女性も混じっているようだ。

もちろん俺たちにもマキハラ少尉が居るのだから、別段驚きもしない。

だが遠くからでも分かるその彼女が操るベルクートの機動は、文句なしにエースのものであると言えた。

彼女が仲間ならば、どれだけ頼もしい事かとも思えるほどに。

その時レーダーロックを受けたという警告音、程なくしてミサイルが敵から放たれたようだった。

コックピットの警告音が、その目標は文句なく俺だと告げている。

咄嗟に引いた操縦桿と急激な旋回で腰にGが加わり押し付けられ、機体はギシギシと音を立てた。

なんとかミサイルを振り切るも、再び後方にベルクートを確認。猟犬の目線が、俺の機体を捉えて離さない。

再び俺の機体にロックをかけようと敵パイロットがHUDを睨みつけ、目前にせまる俺の機体に食らいつく瞬間を今か今かと待ちわびていた。

その時、彼の機体にもレーダーロックの警告音。続きざまにミサイルアラートが鳴り響いた。

「チツ」と舌打ちしながら、彼は急降下してミサイルの射線から逃れつつ東京の街並みがすぐそこに見えるくらいの低高度で体勢を立て直す。

ミサイルアラートがやみ、彼が見上げた頭上にはマキハラ少尉のラプターの姿があった。

『アンタレス2、ミサイルが外れた・・・』

『しかしありがとうアンタレス2、まったく危ない所だった。』

マキハラ少尉のおかげでどうにか敵機の猛追を回避する事が出来たが、それに安堵を浮かべている暇など無い。

フェデリコともう一機がドッグファイトを繰り広げており、敵が沈黙したというわけでもないためだ。

俺と彼女がフェデリコの救援に向かおうとした時、無線ではまたあの部隊の隊長らしい男の声が聞こえる。

『良い腕だ。金が第一の傭兵にしては、なかなか筋が良い・・・』

惜しむらくは、そうだな・・・お前たちの戦う理由とでも言おうか
「さつきから意味不明な事を・・・何が言いたいんだ？」

『なに、簡単な事だ。もし俺たちが、お前たちにお前たちが今受

け取っている報酬よりも上回る額の報酬を約束すれば、こちらに来るのかと言っているんだ』

「何を言うかと思えば、もちろん断るさ。理由はただ一つ、こんな事をしでかしたお前たちが気に入らない」

俺が吐き捨てるように言った言葉を聞いたせいか、敵部隊の隊長はどうやらマスクの下で笑っているようだった。

気に入らないって。言った自分でも、その言葉を反芻してみてもおかしいような気がしてきた。

しかし何回考えても、これまで流れ者として過ごしてきた俺にとって、彼らと戦う理由などそれ以外には無かった。

どんな理由があるかは知らないが、無慈悲に一般市民をSFばりのあんな方法で虐殺するような奴を、天地がひっくりかえっても俺は気に入るに無いです。

そう言う奴らと戦う事というのは、無くなった人々の弔いをできるという一種の自己満足も含んでいるとも思うが、それが人間の求める自己実現本能でもあるだろう。

とにかく、ある意味本能に従って行動しているような俺だが、少なくともテロリストから非難される筋合いは無い。

そう直感的に感じた俺が頭に浮かんだ言葉が、さっきの気に入らない発言だったのだ。

『気に入らない、ね。なるほど。傭兵にしては、なかなか面白い奴だ。サソリのエンブレムか・・・覚えておこう』

眼下に彼の機体が高速で低空を駆け抜けていくのが分かった。

そしてその彼のもとに再び、五機が再集合を果たすと彼らはスピリダスが撤退して行ったのと同じ北方向へと飛んでいく。

ふとリーダーに目を凝らすと、気が付けばあのスピリダスはもう遙か彼方。

それに追いつける追いつけない以前に、まっしぐらにスピリダスを追おうものなら、俺はたちまちベルクートの餌食になりかねない。柄にもなくはやる気持ちを抑えつけるように、俺はスロットルを握る腕にグツと力を入れた。

『スピリダスの当空域からの離脱を確認。 目的は達しえた
ヴコドラク隊、帰るぞ。 帰ったら面白い土産話でもしてやる』

『了解。 ヴコドラク1、土産話とは？』
『だから帰ってからの楽しみだ』

とても戦場とは思えないような、悠々とした会話を彼らはかわしなから北へと離脱して行った。

彼らと言いつレグルス隊にライジエル隊と言いつ、戦闘を何度も経験すればああいう風になるのか？

思えばベルクートとのドッグファイトは時間にして五分程度だが俺たちは嵐が過ぎ去ったような感覚と、緊張がほぐれたのとタイミングを合わせてどつと押し寄せた疲れに一種の気だるさを感じる。

また彼らと同様に、敵の残存航空部隊もその姿を消していた。

『航空要塞、それに敵部隊を逃がしたか・・・だがまあ良い、目的は達したのだからな』

「目的？」

そういえば俺たちは何と戦っていたのだっけと、まるでポケたように俺は突然中佐がいったその言葉にしばしキョトンとなる。

だが下の陸上自衛隊の無線が、俺のボーツとなった意識を現実へと引き戻した。

『敵航空要塞、撤退！』

『航空部隊も逃げていく　勝った！　東京を守れたぞー！』

歓声に拍手喝さいが無線から、耳に痛いくらいに響く。

そうだった、空中給油の際に“東京を頼む”とオペレーターからも言われていたのを俺は思い出した。

寝不足だったせいか思い出すのに時間がかかったが、俺は彼らとの約束を果たせた事に一抹の、いやかなりの充足感を感じていた。

『米軍、ならびにPMC・・・本当に支援感謝する！　君たちのおかげで、首都を守れたよ』

『いえ、貴方がたの支援体制あってこそです。　こちらこそ、作戦遂行へのご協力を感謝します』

中佐と陸自の幹部が会話をしている中、東京の上空を周回していた時、不意にマキハラ少尉が無線越しに話しかけてきた。

『私たち・・・生き残れたのね』

『あー、そうみたいだな・・・グッジョブだぜアンタレス1、なかなか良かった』

『そうか？　別に全員同じ程度に頑張ったと思うけどな』

前日の訓練襲撃から、ようやく俺たちには笑顔が戻った。

少なくとも、二人からの無線越しの声を聞いた俺はそう思えた。

これまでに俺が叩き落とした機数は、全部で4機　　昨日今日で少なくとも4人の命を奪った事になる。

あまり良い気はしないが、そうでもしないと自分が落とされる。

それに相手は、無差別攻撃をしても良心の呵責も何一つないテロリスト。

死刑制度のある国では十分にその極刑が与えられるに相應しい所業だが、それでも納得というか　　まだ踏ん切りがつかないのが俺

の悪い所のように思えた。

これからどうなるのだろうか　俺はふと眼下のビル群で未だに立ち上る黒煙を見下ろしながらそう考えた。

これまでテロリストとの戦いと言うのは、架空でも現実の世界でも良くあった事だ。

だがテロリストが戦闘機や爆撃機、拳銃の果てにどこの先進国でも持っていないような航空要塞を保持しているとは一体どういう事だ？　もしかしたら、俺たちが戦おうとしている相手は想像もつかないほど大きな相手なのかもしれないと、その時はまだ頭の隅に考えついただけの戯言に過ぎなかった。

『M42飛行中隊諸君、今夜のステイ先が決まった。　西南西に針路を取れ、米軍横田基地が受け入れてくれる』

『ヨコタベースか・・・あんまり楽しめそうにないな。　酒は問題ないんだが、あっちの方がな・・・』

『おいおいレグルス？、別にヨコタじゃなくても今日は無理だろうぜ』

『ん？　どうしてだ？』

『今日のメインは、俺たちじゃ無いからさ』

バンクス大尉の笑いながらのその一言に続いて、カノーパスからも笑い声が聞こえる。

こんな時に何だが、一方のライジェル隊は物静かなものだ。

どこの集団にも一人か二人はいたような、ノリの悪い癖にプライドは高いといういわゆるエリート気どりって奴だろう。

まあ実際に実力はあるのだから、あまり悪く言うのもおかしい事だが　　今日も気持ち良くは眠れそうにないかもしれないと思いつながら、機体をバンクさせて一路横田基地へと向かった。

横田基地には、俺たち以外にもたくさん先客がいた。東京襲撃を聞きつけてはるばる山口の岩国から駆け付けていた部隊もいたくらいだ。

幸いにも横田基地は大型輸送機のエプロンやハンガーがたくさんあったため、本来は二機程度しか入らない大型輸送機のハンガーには俺たちの戦闘機ならば十機程度が入る。

そして駐機するや否や、俺たちはエンズリー大尉達や元米軍だった彼の知り合いである気の良い米軍パイロット達に連れられて、食堂の一角を断りも無しに占拠する事になった。

そこで待っていたのは俺たちが初実戦を無事に生き延びた事への、ほんのささやかな祝宴。

もちろんいつまた敵が襲ってくるか分からないため、アルコールの類はご法度。

愉快的アフリカ系アメリカ人のパイロットが、さつき売店で買ってきたというコーラを全員に振舞った。

冷えてなくぬるいコーラだが、それが疲れていた体を内側から刺激する。

その途中でバーフォード中佐やオペレーター陣もその会合に合流する事になり、人数は更に1.5倍近くにまで膨れ上がる。

その規模は、最早食堂の一角というレベルでは無い。半分くらいをブースとして借り出した、出店の集団のような風情だ。

ここでバーフォード中佐は、今分かっているだけの情報やこれからの予想を俺たちに淡々と説明を始めた。

その前になぜブリーフィングルームではなく、こんな食堂でやるのかと思つたが、東京での戦闘は終わったとは言え未だに厳戒態勢の防空体制に、特に首都に近い基地だという事、おかげでブリーフィングルームに集められているのは緊急性の高い任務を帯びた連中だけ。

それに俺たちは結びつきは強いとはいえ米軍ではないので、貸し出しがすんなりと行く筈も無い。

偶然にも最初に行きついた先が、必然的に俺たちの待機所扱いになっていた。それも自然に・・・

そこで初めて正式に上官から述べられた敵の名前、それは俺が訓練襲撃中に敵パイロットの狂気の叫びと共に聞いたものと全く同じだった。

“ヴァラヒア” 吸血鬼伝説発祥の地である、ルーマニアの地名“ワラキア”のルーマニア語読みを名前とするテロ組織。

なんとも名前から禍々しい連中のように思える。

普通なら名前負けするようなチンケな武装集団が夢の見過ぎで付けそうなネームだが、あんな巨大航空要塞などを見せられた今ではその名前でも納得できない事も無い。

その組織“ヴァラヒア”を取りまとめている男の写真が、所々にこぼれたコーラで濡れた机の一角に広げられた。

車から降りた時に撮られたものだろうが、どこか遠くを見つめるような男の目には、遠くにある何かを望むような目線と同時に冷酷無慈悲な彼の性格を伺い知れるようだった。

ニコラエ・ドウミトレスク この男が、あんな惨事を！

俺はこの男が、何を考えてヴァラヒアを組織し、どんな目的で同志を集め、どんな理由で東京を侵攻したのかは知らない。

しかし無意識のうちにか、俺は生涯何度目かの心底侮蔑するべき相手へと向ける目線を、その写真へと向けていた。

この男にどんな戦う理由があるかと 俺はこの男をもうこの時点で許す気にはなれなかった。

勢いでグイと飲み干したコーラ。

それがささやかながら、初陣を見事に白星で飾れた自身への祝杯だった。

|||||

恐る恐る部下が告げた、東京侵攻失敗を聞いて彼は思わずその理由を聞いた。だした。

だがその理由が航空要塞や侵攻部隊の怠慢や瑕疵ではなく、防衛に出た自衛隊や米軍、さらには米軍が雇ったであろうPMCの所為によるものだと知り、彼は“ならば良い”とそれ以上の問答はしなかつた。

『どうせ、東京侵攻にはこれと言って戦略的意味合いは殆どない。

スポンサーの意向ではあるが、決定した一番の理由は・・・そう、あれは“存在してはならない国”だからだ』

そうドウミトレスクが語ったのは、東京侵攻を決めた当日。

相手は同じ東欧諸国出身の同志であり、ヴァラヒア内での立ち位置はドウミトレスクの僅かに下程度。いわゆる腹心の部下と言う奴だ。ドウミトレスク自身もそして電話口の彼も、生まれも育ちもそれぞれ厳格な共産圏内の独裁国家。

だが革命の煽りで脆くも国は崩壊　人望の無かつた首脳陣はその場で引きずり出され、そして市民たちの手によって公開処刑された。

そしてその国では立場的に敗者となったドウミトレスク自身も、泥と敵の血を嚼つてでなければ生きられない者となった。

敗者には無慈悲な末路が待ち受けている　それはテロリストとしてでなければ生きられないというドウミトレスクが、自分自身で体現していた。

だが世界にはそんな摂理を捻じ曲げた国がある。

そこは主義主張が真つ向から対立し合った為、起きた戦争に敗北したにもかかわらず、どういいうわけか世界有数の裕福な国家になっている。

それは世界が存在する規律に近いシステムの矛盾
ーだ。 いわばエラ

彼や彼と志を同じくする者にとつて、その38万平方キロメートルの国土が削除に値するバグだったのだ。

まあこの理由を敵が知れば妬みによる犯行と、罵声を浴びせられるだろう。

だがそれがどうした？

戦争やテロというものは、常にそういった負の感情から生まれるものではないだろうか？

つまりそういった非難は、仲間に近い集団から同調を得るための口実に過ぎない。

清純な心からの言葉ではなく、狡猾な政治家の脳が考え出した打算的な発言に人々がつられ、そしてまた新たな犠牲者を生む。

それが資本主義の世の中の、現実だとドウミトレスクは考えていたし、同時に堅く信じていた。

ともかく、戦いの火ぶたは切って落とされた。

彼はグラスに注いだ血のように赤いワインを口に含み、ささやかな勝利祈願の祝杯とした。

Sortie 6 : The Doubt ? (前書き)

なのはも不定期更新化したこの頃・・・

未だに資金不足で全機種が揃わないorz
どんだけ高価なんだよww

Sortie 6 : The Doubt ?

『我らが進歩を、愚行と罵るならば罵るが良い！ だが我らが悲願への邪魔をするならば、君たちへ劫火が無慈悲にも襲い来るだろう！ その事だけは、覚悟してもらおう』

いかにもテロリストらしい威圧的な文句で構成された犯行声明は、東京襲撃から三日後には全世界の一般市民へと知れ渡るに至った。普通テロリストの首領ならば、マスコミにテープを送りつける時には音声のみであったり、画像にモザイクを入れるなりして、被写される人間を隠したりするのが常である。

だが驚いた頃に、ヴァラヒアのリーダー、ドゥミトレスクはその顔を隠すことなく、一国の大統領のように所信演説ばりの口調で次々と、先日の襲撃に関してある事無い事を言い放つ。

本当は聞く気も、更には覚える気も無かったのだが、基地内のテレビがここ数日間延々とヴァラヒア関連のニュースを流し続けている。日本と言う一国を狙っただけのテロ行為ならば、数日後にはどこかは報道しなくなるテレビ局があっても良さそうなものだが、彼らの標的はこれまた資本主義国家と来たもんだ。

そうなる旧共産圏の国家を徹底的に調べ上げたくなるものだが、東側のボスとして君臨していたロシアに中国がそれを易々と許す筈も無い。

“そのような組織との関係は一切無い”という公式発表の一点張りを続けているだけで、何の進展もありやしない。

既にCIAやその手の情報機関は、ヴァラヒアの事についてかなりの点を調べ上げているだろうが、そちらからも何の情報も無いため、マスコミは仕方なく送りつけられたテープをまた延々と流したり、どこから引っ張ってきたのか分からない専門家を招いては、キャス

ターがその専門家がいう予想やら憶測やらを相槌を打っているだけだ。

それらの番組のおかげで、そのワードだけは妙に俺の頭に残ってしまっていたのだ。

さてそれはどうでもいいとして、俺たちを含めM42飛行中隊のパイロット達はブリーフィングルームに集められた。

ブリーフィングルームと言っても、米軍とは別に俺たちのソレは明らかに空いている会議室か何かをただ使用しているというだけの、即席ですらない会議室そのままのブリーフィングルーム。

ここ一週間以上、延々と関東周辺空域の哨戒飛行を一日に二回と、トレーニングやらで終わる毎日を過ごしてきた。

おかげでこのミーティングというのは、なかなか新鮮に思えたり、ここでまた何か新しい情報が分かるかもと思ったり俺は少しばかりワクワクしていた。

全く不謹慎な話である・・・分かる情報というのは、知った所で嬉しいものではないという予想が出来ているというのに。

そんな中、おそらくヴァラヒアに関する資料だろうと思われるプリントが中佐達の手により配布される。

マキハラ少尉から手渡され、俺とフェデリコは軽く感謝を述べると早速その資料へと目を通す。

一見すると全部文章だなと思いつながら、ホツチキスで留められた左上を折り曲げてめくり、そして二枚目には偵察衛星からの写真らしきものが掲載されている。

その情報の出処はどこだと気になった俺は、一枚目に戻り一行目を凝視すると、それは国防総省ペンタゴンからの物であると控えめであるが明確に記されていた。

「行き渡ったな？ 今諸君に配った資料は、ペンタゴンより第七艦

隊経由で発表されたヴァラヒアに関する新情報だ。諸君ならばもう分かっていたと思うが、ヴァラヒアはやはり普通のテロ組織とは違う。二枚目を見てくれ」

皆が一斉に一枚目をめくる音が、シーンとしていた部屋に反響するように広がる。

さっきも一度ちらっと見たが、それはどこかの航空基地を撮影したものらしい。

だがその写真には、少しばかり兵器に精通した者としてはどうしても不可解に思える点があった。

「見てもらうと分かるが、この基地にはF-15イーグルにフランクが同棲生活をしている。それだけではない、アメリカ以外に採用歴の無いB-2爆撃機まで奴らは保持しているらしい」

日に日に陰しさを増す中佐の表情だが、予想以上に相手が大物だった事に俺たちも驚きを隠せない。

資料には彼らが保持しているであろう兵器リストの他に、関与しているであろうと思われる人物たちのリストも掲載されていた。

どの人物もほとんどが東欧圏の出身で、かつて前世紀に栄えた各国軍の将軍や派閥のリーダーなどがこぞって名を連ねている。

崩れ去った筈の共産主義が残した怨霊、それがまさしく俺たちが戦おうとしている相手だったのだ。

そしてこの時、フェデリコが俺たちの疑問のど真ん中に行く言葉をポツリと呟いた。

「しかし、なんでフランクにファルクラムじゃないんだ？ 東欧圏といえ、あのあたりの戦闘機が普通だろ？」

「そういえば……。旧東側の国の主な兵器輸入先は、旧ソビエト……ヴァラヒアも、その流れをくんでいる筈なのに一体……」

？」

「兵器の購入先は西側・・・それもアメリカ。」

「まさか・・・。だって今回の攻撃で一番被害を受けたのは、アメリカの同盟国日本だろ？」

「じゃあイーグルは別に良いとして、スピリットはどう説明するつもり？ あれはまだ、アメリカ以外の国に保有を許してないわ」

支援先は西側、だったらこの組織は一体。

いや、そもそもあの巨大航空要塞もそうだが、そんな先進的な技術やそれを具現化できるだけの資金や労働力、そのようなものを一テロリスト如きが持ち合わせて良い物か？

テロリストと言えば、砂漠でAKを構えている、コソコソと爆弾を仕掛けてテロを起こす。少なくとも俺の頭に浮かぶテロリスト像と、ヴァラヒアとは大よそかけ離れている。

「ヴァラヒア 彼らにはまだ、謎が多い。だが、一つだけ分かっている事は 奴らが無差別に破壊を行い、それを善しとする狂人の集団だと言う事だ！」

バーフォード中佐の言葉には力が入っている。

俺だってあんなの見せられたら、中佐の言葉に力強く頷く以外の術は無い。

ついでに気付いた事はこのミーティングが、とりあえず要約すると「ヴァラヒアという正体不明かつ極悪非道の組織と戦う事になるが良いか？」と言う事だろう。

不謹慎な話だが、命を担保に飯の食い扶持が確保出来そうだ。

だがそれ以上に、次はいつどこで起きるか分からない惨劇を阻止したいという思いが俺たちの中には強く芽生えていた。

アメリカの都市バージニア、アーリントン郡

朝日が大西洋から昇ってくる中、その陽光が街中にある巨大な五角形を浮かび上がらせる。

米国防総省、通称ペンタゴン。

アメリカの指揮下にある軍隊の全てが、ここに集約していると言っても過言ではない程のいわゆる城塞だ。

しかしこの城塞は世界各地に城跡などで残る五稜郭とは違い、巨大な防壁や大口を開けた大砲が顔を覗かせているわけではない。

国防総省が作る幾千幾万の情報網によって構築された情報戦力こそが、この国防総省のみならずアメリカ、いや世界中が望むである筈の平和の防塞なのだ。

異論は勿論あるだろう　だがアメリカ人の多くはそう信じてやまないもの確かだ。

そして犠牲を強いて来た反面、この国に歩調を合わせる国に多少なりとも恩恵を与えて来た事もまた事実。

ならばこそ、このような世界情勢下で一番働かなければならないのも現代の五稜郭で戦う彼らであろう。

そこそこ広い部屋にポツンと一つしかないデスク。

部屋いっぱいデスクが広がりコードがツタのように地面を這っている他の部署からするならば、この光景は何と羨ましいかと思われるかもしれない。

だが現実には激務に続く激務だ。

むしろ若いころにいた空軍アグレッサー部隊で上官や部下と厳しくも楽しい兵役についていた方が良かったかもしれないと、この部屋の主のハロルド・コール長官補佐官は考える。

あの頃は世界の空が自分たちの全てだったが、今ではこの部屋とデ

スクが自分の世界……。

随分と世界が小さくなったものだ、彼は自分の加齢に配慮してくれた空軍将の薦めでこの国防省の人間になってから数えきれない溜息を吐いた。

そういえばそれも最近増えた。

あのヴァラヒアがテロ活動を行っていると知るや否や、コールは昔のように戦闘機を駆ってテロリズムを繰り広げる患者に鉄槌を下したいとさえ思ったことだ。

もつとも、今できる事といえば権力を持つ人間を補佐する事だけなのだが

そんな折、実に十何時間ぶりにか内線のコール音が鳴った。

何事かと思いコールが受話機を手に取ると、半ば眠りかけていた脳に突き刺さるように聞こえて来たのは新兵時代以来の友人の声だ。

「コール補佐官だ」

「コール！ 受付嬢がお前がデスクワークで死にそうだと言っていたからどうかと思っていたが　　ハハッ、まだ生きているようだな」

「なんだバーフォードか。それに受付嬢ではなく、取り継いだのは多分統合参謀本部のOだ」

「それはもつたいたない事をしたな　　いや冗談だ。　　ところで、例の情報はこちらとしては実にありがたい情報だった。礼を言うよ」

バーフォードが言っているのは、CIAや国防総省がこれまでに集めたヴァラヒアのデータの事だ。

そしてその一端をバーフォードのMS社に裏口から密かに渡したのは、他でも無いコールであった。

「一応機密なんだろう？　お前の送ってきたファックスには、“機

密”やら“外部持ち出し禁止”のスタンプが映り込んでいた』

「“一応”だな。何、気にするな・・・どうせあと3時間後くらいには全世界の人間の知る事の出来る範囲に、ほんの少し毛の生えたくらいのネタしか寄越してない」

『しかしまあ、なんにせよ部隊員の表情が引き締まった。』

「ああそう・・・。」

『それでだ・・・捜査の方はどうなんだ？』

「ん？」

『とぼけるな・・・西側の兵器が多数、敵の手に渡っているというのはお前からの情報じゃないか。そうなると、もうFBIやひよつとするとNSA（国家安全保障局）までも捜査に乗り出している・・・』

「流石に言えないな・・・。」

『“言えない”と言う事は、何かは知っているんだな？』

「そうだな、バーフォード・・・。アレはその形をした別物なんじゃないのかっていう説もある、とでも言っておこうか。ともかく、これ以上は無理だ」

流石にこれ以上の情報引き出しは無理かと電話口でバーフォードが諦めていた時だ。

菓子を買いに来た子供にオマケをつける店主のような口調で、コールはポツリと呟いた。

「まあ、近いうちにお前たちの力が必要となる時が来る。その時までには、何かしら分かっているだろう・・・。」

『近いうちに・・・？どういうことだコール？』

「それじゃあな。お役所勤めといえども忙しい身なのでな」

真意を確かめようと引き留めるバーフォードの声が耳に入るより早く、コールは電話を一方的に切り受話機を置いた。

(お前と腹を割って色々と話したいのは山々なんだが・・・俺は一応国家の一端を背負っている身だからな)

物思いに冷めたコーヒーを啜り、コールがそのカップをデスクに置いた。

いつも机と反対側の窓から見える景色を見ながら電話をするクセがあるためか、コールはいつの間にか卓上のファイル立てに新しいファイルが挟まっているのによく気付いた。

おそらく電話中に部下が持ってきて、いつものように後ろを向いて電話をしている自分に気付かれないうちに置いて行ったものだろう。

- The Plan of International Union Peacekeeping Forces (多国籍治安維持軍に関する計画) -

そのファイルのタイトルには、太字のブロック体英文字でそう書かれていた。

20XX年 11月29日、2200時(日本時間) 在日米軍横田基地・・・

訓練と哨戒飛行、時折ほんの少し羽目を外して大尉達と酒という毎日が、東京襲撃から気が付けば二週間が過ぎようとしていた時だ。俺たちと意気投合していた通信部の連中が、急にいなくなったかと思えばどうも騒がしくなった。

あの様子だときっと何かあったに違いない。

俺の見立てではあんなに慌てていたのは東京襲撃の後処理に回っていた頃と同じか、むしろそれより忙しく動き回っている。

ついに来たか!?

俺もマキハラ少尉も、そしてフェデリコも上部から何らかのお達しがある事を覚悟した。

それからもう30分もしないうちに、俺たちアンタレスやエンズリ―大尉達のレグルス、スレイマ二大尉たちのライジエル隊の面々が中佐のもとへと呼ばれた。

「待っていたぞ。」

「ヴアラヒアかい、中佐?」

オルマ中尉の質問に、ああそうだと中佐は頷く。

急を要すると言う事は、既に敵は向かってきているということなのか?

席に座る直前、俺の脳裏にまたあの巨大航空要塞の姿がよぎった。

「今から約一時間前、未確認かつ多数の航空機ならびに南部からは加えて船舶の接近が確認された。航空機は現在特定を急いでいるが、特に気になるのはその船舶だ」

「船舶の種別ははまだ不明ですが、中には大型艦が複数あり、自衛隊の護衛艦が捉えたレーダーの反射影から推測される大きさは全長150m〜160m、排水量は1万トンと少しのことです」

俺は羽沢伍長が言う大型艦の正体が良く分からない　どうも陸や海の方は専門外だ。

すると無知な隊長を差し置いて、二番機が的確な推測を放った。

「揚陸艦、ではないですか?」

「そうだな、少尉。我々もその可能性があると思っっている」
「揚陸艦だつて!? オイオイ、奴ら本気で日本を乗っ取るつもりか?」

マキハラ少尉は明晰と言い、落ち着き具合と言い、本当に隊長に向いているのは彼女なんじゃないかと思うのだが
イマイチ、自分を部隊長に推挙したという根拠に欠ける気がするの
は俺だけなんだろうか。

「北の日本海側から攻めてくる航空部隊には、自衛隊と第七艦隊および在日米空軍の部隊が事に当たるので良いだろう。問題は我々、M42飛行中隊にも参加要請があつた南部から攻め込んでくる敵だ」
「揚陸部隊、ですね?」

「ああ、だがそれだけでは無い。伊豆諸島には、おそらく自衛隊機の対艦攻撃を阻止せんとヴァリアの別働隊が向かっているようだ。これを阻止せねば、房総半島での作戦遂行に大きく支障が出てしまう。そこで・・・M42飛行中隊を二分割。二作戦に分かれて行動をしてもらいたい」

二手に分かれると言う事は、どうなるのだろうか・・・?
伊豆諸島沖での要撃戦か、房総半島で初となる地上攻撃か?

「それに時間も押しているため、勝手ながら既に出撃する編成を決めている。伊豆諸島にはレグルス隊に向かつてもらう。あとはもう分かるな?」

勝手すぎるぜ、中佐。

よりもよつてキリアコフ中尉の嫌味の防波堤になってくれていた
エンズリー大尉達と別れて、ライジェル隊と共同任務とは・・・。
だが少し考え方を変えてみれば、これは自分たちの実力を彼らに示

すまたとない機会かもしれない。

いや、二度はあつて欲しくないが。

フライトプランを羽沢伍長から手渡されると、俺たちの機体はこれまでとは大よそ違う武装を搭載することだった。

短射程のAAMを二発までは一緒だが、その後はGPB誘導爆弾やAGM(対地ミサイル)、俺の機体に限ってはLASM長距離対艦ミサイルがああ翼下に垂れさがるこの事だ。

出撃は明日の1200時、それまでに武装の積み替えなどやるべきことはたくさんある。

そこでそろそろとルームに集められたメンバーが帰る中、何かをしましようかと俺は中佐に尋ねた。

しかし中佐は俺や俺を待っていたマキハラ少尉やフェデリコに向かって一言……。

「そうだな……よし、寝ていたまえ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0605o/>

ACE COMBAT X2 JOINT ASSAULT ~ 結束の戦場 ~

2011年10月5日19時45分発行